
名探偵・スウと篤子の事件簿

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵・スウと篤子の事件簿

【Nコード】

N8393A

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

高校生探偵・明日岡スウと浜谷篤子が、仲間達とともにさまざまな難事件を解決していく。

FILE 01：波乱の高校生活の始まり

オレの名前は明日岡^{あすおか}スウ。

少しは名の知れた探偵だ。

オレは今、大阪の柏大学付属高等学校に通っている。

小中高大一貫教育の、私立の学校だ。

「あーあ、かつたりい・・・高校まで行くのって、ダルいよ、まったく・・・」

「文句言わないの、スウ！」

オレをたしなめたこの女の名前は、浜谷^{はまや}篤子^{あつこ}。

オレの幼なじみで、大切な恋人だ。

「篤子はダルくないのかよ？」

「確かに、高校生活は大変だよ。でも、スウと一緒に学校行けるから、辛い気持ちも吹き飛んじゃうんだ。」

「・・・ったく、恥ずかしいじゃねえかよ・・・」

オレと篤子は、現在柏田マンションに住んで、そこから学校に通っている。

というのも、オレ達は小学校の頃から柏高校に通っていて、家が遠いためにお互いの両親に許可をもらって、マンション暮らしをしているのだ。

そのため、オレ達の事を知っている親友達からは、すでに夫婦扱いされている。

「スウ、いよいよ高校生活スタートだね。」

「ああ、気合い入れていくぜ、篤子。」

「うん！」

オレと篤子は、手をつないで学校に走っていった。

「やったあ！スウとクラス一緒だー！」

篤子は、クラス分けの表を見て、はしゃいでいる。

「そんなに喜ぶ事か？」

「うん！だって、スウとは9年間、一度も離れ離れになってないんだもん！」

「ある意味、奇跡に近いよな・・・」

オレと篤子は、1ーQの教室へと急いだ。

そしてこれこそ、オレ達2人の波乱の高校生活の始まりだったのだ・

・

FILE 02：謎めいた3人のクラスメート

オレと篤子は、1 - Qの教室の扉をくぐった。

「・・・なんか、緊張するね、スウ・・・」

「そうだな。」

篤子に比べると、オレは少しばかりこういう状況に慣れている。

「それにしても、変だよな。」

「何がだ？」

「だって、中学校までは、『1 - 1』『1 - 2』『1 - 3』ってクラス分けされてたじゃない。なのに、どうして高校になって、『1

- A』『1 - B』『1 - C』ってクラス分けになるの？」

篤子の疑問ももっともである。

だがオレは、その理由がわかっていた。

「ああ、おそらくそれはだな・・・」

「このクラス分けは、将来になりたい職業別にクラス分けされているんだよ。」

オレが篤子に説明する前に、メガネをかけた角刈りの少年が、パソコンをいじりながら答えた。

「・・・オマエ、誰だ？」

するとその少年は、フツと笑った。

「自己紹介が遅れたね。ボクの名前は笠^{かさ}美^み雄^{ゆう}也^や。笠美財閥の御曹司さ。」

「ああ、あのゲームメーカーの息子だな？」

「そういう事。」

笠美雄也は、フツと笑った。

「ところで、君達の名前は？」

「オレは明日岡スウだ。」

「アタシは浜谷篤子よ。」

「『神童』と呼ばれ、日本警察でも手に負えない難事件を次々に解

決してきた、IQ測定不能の名探偵のカップル・・・小生のメモにはそう記録されている。」

不意にオレ達の後ろから、1人の少年が現れた。

「ああ、失礼。小生は畑中葉平^{はたなか ようへい}。以後、お見知り置きを。」

畑中葉平は、丁寧にお辞儀をした。

「メモ魔ってワケか。じゃあ、クラス分けの表全部メモってある？ あつたら教えてほしいんだけど。」

「ちよつと待って、それは・・・」

「1 - A B C D E F G、H I J K L M N、O P Q R S T U、V W X Y Z・・・一年から三年まで共通。すべて職業別に振り分けられたクラス。あ、ウチは青木雅子。よろしゅうにな、明日岡スウ君、浜谷篤子ちゃん、笠美雄也君、そして畑中葉平君。」

青木雅子という少女は、クスリと笑った。

FILE 03：資格を与えられた者達のクラス

青木正子は、クスリと笑っていた。

「篤子、ちょっと来い。」

オレはそう言っていると、篤子の手を引っ張った。

「キャ！」

オレは篤子を廊下へと連れ出した。

「ど、どうしたの？ スウ・・・」

「篤子、よく聞けよ。笠美雄也、畑中葉平、そして青木正子・・・コイツらは、それぞれの部門のエキスパートだ。」

「え？ え？」

篤子は、何が何だかわからないらしい。

「まず笠美雄也だが、コイツは某有名企業、笠美財閥の御曹司だ。愛用のパソコンで、いろいろな情報を得ている。次の畑中葉平は、メモリング、つまり記録のプロ。そして最後の青木雅子は、瞬間記憶の能力者だ。」

「し、瞬間記憶！？」

「ああ、一度見たものは二度と忘れない。便利でもあるし、やつかいな能力ちからでもある。」

オレは一拍おいて、話を続けた。

「あの3人がそれぞれ持つ特技・・・それらはすべて、ある職業に必須の力だ・・・何なのか、わかるか？」

「探偵・・・ね。」

「そつだ。おそらくこのQクラスの創設者が、伝説の名探偵なのだろう。つまりこのクラスの『Q』の意味は・・・」

オレは、静かに答えた。

「『クオリファイド（Qualified）・・・つまりこのQクラスは、『資格を与えられし者』のクラスってワケだ・・・」

「じゃあ、アタシ達がこのクラスに選ばれたのも・・・」

「そうだ。オレ達2人も、あの3人と同じく、探偵にふさわしい能力を持っていたからだ・・・」

オレは篤子の手をにぎり、Qクラスのドアを開けて戻っていった。

FILE 04：間違いだらけの出席とり

オレと篤子が教室に戻った時、ほぼ同時に担任と思われる男が入ってきた。

「全員、着席！！」

オレ達は、それぞれの席に座った。

オレと篤子は隣どうし、笠美はオレの左隣、畑中はオレの前、青木は篤子の前になった。

「オレがオマエ達の担任をする事になった、かるいざわ みやび軽井沢雅だ。今年一年間、オマエ達と楽しく過ごせたらと思っている。では、まず簡単に出席をとっておく。藍沢、赤城、朝霧・・・あしたおか・・・」

「先生、オレは『あすおか』っていうんです。」
オレは即、反応した。

「ス、スマン・・・『あすおか』か。メモしておこう。次は麻生、斑鳩、宇佐美、榎本、小倉、刑部・・・」

軽井沢の声が止まった。

「次は、かさび・・・」

「先生、『かさみ』です。」

「スマン、『かさみ』か・・・でも、次からは読めそうだ。北浦、久米、越路、近藤、瀬戸川、曽我、滝沢、戸越、丹羽、能代、萩原、はたけなか・・・」

「『はたなか』です。」

「スマン・・・穂波、松平、御堂、柳葉、吉沢。よし、今呼んだ中でいないヤツは返事しろ！」

「いないヤツが返事できるワケないだろ・・・」

「あの先生、アホやな・・・」

「シッ、聞こえるよ！」

「次は女子だ。浅井、綾小路、五十嵐、宇津木、江戸川、あおき・・・」

「うち、『おおぎ』っていうんです。ホラ、阪神電車の駅の・・・」
「ああ、青木駅の『青木』か。メモしておく。次からは止まる事はなさそうだ。木ノ下、楠本、工藤、小嶋、真田、酒々井、水郷、妹尾、伊達、円谷、遠山、中森、二階堂、野上、灰原、服部、はまたに・・・」

「『はまや』です・・・」

「スマン・・・浜谷、水戸、毛利、山内、湯江、吉田・・・よし、全員いるみたいだな。では、廊下に整列!!」

FILE 05：入学式、そして始まり

オレ達は、軽井沢雅に連れられ、体育館までやって来た。そこにはすでに、他クラスの新入生達が集合していた。

校長先生が、新入生の名前を読み上げ始めた。

次々に名前が呼ばれ、オレ達のクラスまで回ってきた。

まずはオレ達男子組だ。

「藍沢桜。」

「はい！」

「赤城秀二。」

「はい！」

「朝霧哀。」

「はい！」

「明日岡スウ。」

「はい！」

麻生、斑鳩、宇佐美、榎本、小倉、刑部ときて、次は笠美だ。

「笠美雄也。」

「はい！」

続いて北浦、久米、越路、近藤、瀬戸川、曾我、滝沢、戸越、丹羽、能代、萩原と次々に名前が呼ばれ、次は畑中の番だ。

「畑中葉平。」

「はい！」

穂波、松平、御堂、柳葉、吉沢といって、オレ達男子は終わった。

次は篤子達女子組だ。

「浅井成美。」

「はい！」

「綾小路梨華。」

「はい！」

「五十嵐早紀。」

「はい！」

「宇津木遥。」

「はい！」

「江戸川小波。」

「はい！」

「青木雅子。」

「はい！」

その後、木ノ下、楠本、工藤、小嶋、真田、酒々井、水郷、妹尾、伊達、円谷、遠山、二階堂、中森、野上、灰原、服部と名前が呼ばれた。

次はいよいよ篤子の番だ。

「浜谷篤子。」

「はい！」

それから、水戸、毛利、山内、湯江、吉田と呼ばれて、全員が終わった。

その後、校長先生の話が始まった。

「この度は、我が柏大学付属高等学校に諸君らが入学された事、まことにめでたく思います。して、最近の経済事情は・・・」

話が長いので、省略する。
そして、教室に戻ったオレ達の、いよいよ自己紹介が始まるのだった。

FILE 06：自己紹介は何かの始まり？『1』

教室に戻ったオレ達には、いよいよ自己紹介が待っている。

「それじゃ、順番に自己紹介をしてもらおう。まずは藍沢桜！」

「はい！」

あいざわ さくら
藍沢桜が、前に出てきた。

「愛媛第一中学校から来ました、藍沢桜です。実家が果樹園なので、果物に関しては少し知識があります。皆さん、仲良くしてくださいね。」

いい自己紹介だ。

暖かい拍手が上がった。

「次は、赤城秀二！」

「はい！」

あかぎ しゅうじ
赤城秀二が前に出た。

「横浜東校から来ました、赤城秀二です。サッカーには自信があります。よろしく。」

これも悪くない。

あさぎり あい
次は朝霧哀だ。

「自分は朝霧哀。それ以上でも、それ以下でもない。」

朝霧は、静かに席に着いた。

「じゃあ、次は明日岡スウ！頼むぞ！」

「はい。」

オレの番が来た。

「柏大学付属中から上がってきた、明日岡スウです。皆さんよりも若干この学校の事がわかりますが、そんな事は抜きにして仲良くやっていきたいです。あと・・・皆さんお気づきだと思いますが、このクラスは他のクラスとは少し違います。」

「違うって、どう違うんですか？」

ショートの女の子が手を上げた。

「えーっと、君は？」

「湯江朝美ゆえ あさみです。」

「湯江さんだね。では、今から説明しますが、この高等部のクラス分けは、数字ではなく英語になっています。なぜかわかりますか？」
オレは質問を投げかける。

みんな首を横に振った。

「わかりませんか。この高等部は、将来になりたい職業別にクラス分けされているんです。例えばDなら『ドクター』。医者です。そしてこのクラスは、Q。この意味は『クオリファイド』。『資格を与えられた者』という意味です。このクラスの設立者は、おそらく探偵・・・ボク達がこのクラスに選ばれた以上、Qクラスとしてほこりを持って、勉強に勤しんでいきましょう。終わります。」

この自己紹介は効いたようだ。

全員から暖かい拍手が上がっている。

オレは、篤子にピースサインでウインクする。

篤子は、とてもうれしそうな顔をしていた・・・

FILE 07：自己紹介は何かの始まり？『2』

オレ達男子の自己紹介は全部終わった。

次は篤子達女子の番だ。

浅井成美の自己紹介が終わり、順番が綾小路梨華まで廻ってきた。
あやのこうじりか

「東京の天ノ下第一あまのした中学校から来ました、綾小路梨華ですわ。いずれ、このクラスの中心的存在になっていくと思いますが、皆さんよろしく願いますわ。」

「流石は『天下一』だな・・・」

「『天下一』？」

「天ノ下第一、略して『天下一』だ。あそこにはああいうのが多いんだって・・・」

「へえ・・・（まるで雨宮だな・・・）」

笠美の言葉に、スウは中等部の時の雨宮マヤの事を思い出していた。彼女も、こんな高飛車な性格の女だった。

「ああいうの、気に入らないな・・・」

雅子の目つきが鋭くなっていた。

五十嵐早紀、宇津木遥、江戸川小波と続いて・・・

「次は・・・青木！ちゃんと覚えたぞ！！」

青木雅子まで順番が回ってきた。

「京都の嵐山第一中学校から来ました、青木雅子です。ウチは、権力を笠に着る者、弱者をいたぶる者、他人を見下す者・・・そういう曲がったヤツらが大好きです！！ウチは真っ向から向かっていくつもりなんで、覚悟してください！！！！」

辺りの空気が重くなり、みんな静かになった。

綾小路梨華は唇を噛んでいた。

雅子は彼女をひとにらみすると、席に着いた。

「へー、けっこう正義感が強いんだなあ。」

「ウチは、ああいうんが大嫌いやからな！」

しばらくして、順番が篤子まで廻ってきた。

「柏大学付属中から上がってきた、浜谷篤子です。皆さん、よろしく。」

みんなの顔つきが変わった。

それはそうだ。

この学校自体から上がってきたのは、オレと篤子の2人だけだからな・・・

妙な事を聞かれない事を祈ろう。

オレは、そう思った。

FILE 07：自己紹介は何かの始まり？『2』（後書き）

1年Q組 全生徒紹介

男子

藍沢桜 あいざわいくら	愛媛第一中学校
赤城秀二 あかぎしゅうじ	横浜東中学校
朝霧哀 あすあが	小倉橋中学校
明日岡スウ あすおか	大阪柏大学付属中学校
麻生秀樹 あそう ひでき	大阪春日野中学校
斑鳩昌人 いかるが まさと	大阪春日野中学校
宇佐美直紀 うさみ なおき	秋田白銀中学校
榎本鈴 えのもとりん	広島原島中学校
小倉健一 おくらけんいち	秋田白銀中学校
刑部俊也 おさかべしゅんや	秋田白銀中学校
笠美雄也 かさみ ゆつや	大阪春日野中学校
北浦慎吾 きたうら しんご	沖縄合谷第四中学校
久米光一 くめ こういち	兵庫昇明倫中学校
越路快斗 こしじ かいと	広島原島中学校
近藤善太 こんどう ぜんた	兵庫昇明倫中学校
瀬戸川煉 せとがわ れん	東京天ノ下第二中学校
曽我正樹 そが まさき	兵庫昇明倫中学校
滝沢義経 たきざわ よしつね	沖縄合谷第四中学校
戸越勇二 とこし ゆうじ	東京天ノ下第二中学校
丹羽京介 にわ きょうすけ	沖縄合谷第四中学校
能代菊 のしろ きく	和歌山柑橘中学校
萩原録郎 はぎわら るくろう	東京天ノ下第三中学校
畑中葉平 はたなか ようへい	兵庫昇明倫中学校

穂波北斗 ほなみ ほくと まつだいほうと	沖縄合谷第四中学校
松平健三 みづへい けんぞう	東京天ノ下第二中学校
御堂和馬 みどう かずま やなぎば もみじ	北海道網走第七中学校
柳葉紅葉 よしざわ いっせい	東京天ノ下第二中学校
吉沢一生	北海道網走第七中学校

女子

浅井成美 あさい なるみ	長野鐘巻中学校
綾小路梨華 あやのこうじりか いがらし さき	東京天ノ下第一中学校
五十嵐早紀 いづみ はるか	北海道網走第七中学校
宇津木遥 うづき へるか	東京天ノ下第三中学校
江戸川小波 えどがわ こなみ おおき まさこ	東京帝丹中学校
青木正子 きのした よしこ	京都嵐山第一中学校
木之下洋子 くすもと ようこ	東京天ノ下第二中学校
楠本ジェミニ くすもと にみ	東京天ノ下第二中学校
工藤新美 こうとう しみ	東京帝丹中学校
小嶋素子 こじま もとこ さなだ みずな	東京帝丹中学校
真田水菜 しずみ かすみ すいこう あやか	長崎蓮天望中学校
酒井香澄 せいこう あやか	北天下茶屋第一中学校
水郷綾香 せのあきようこ	北天下茶屋第一中学校
妹尾香子 だて まさむね	北天下茶屋第一中学校
伊達正宗 ついで やむつみ	東京天ノ下第三中学校
円谷睦美 とあやまらん	東京帝丹中学校
遠山蘭 にかいどう ひかる	大阪寝屋川中学校
二階堂光 なかもり みどりこ	北天下茶屋第一中学校
中森緑子 のがみあおい	東京帝丹中学校
野上葵 はいばら ゆい	東京天ノ下第三中学校
灰原結衣 はつとりしず	東京帝丹中学校
服部静	大阪寝屋川中学校

はまや あつこ 浜谷篤子 大阪柏大学付属中学校
みと あかね 水戸茜 長崎蓮天望中学校
もつり 毛利アン 東京帝丹中学校
やまうち ちよ 山内千代 長崎蓮天望中学校
ゆえ あさみ 湯江朝美 北天下茶屋第一中学校
よしだ まゆみ 吉田真弓 東京帝丹中学校

担任 かるいざわ まさ 軽井沢雅

FILE 08：11個のグループ分け

休み時間になると、やっぱりクラスメート達がオレと篤子に話しかけてきた。

質問される事といえば、おそらくはアレ意外にはない。
オレと篤子の関係をだ。

「なあ、明日岡と浜谷さんってどんな関係なんだ？」

「幼稚園の時からずっと一緒の学校の幼なじみだ。」

「浜谷さんって彼氏いんの？」

「いるよ。スウなんだ。」

「へー、幼なじみで両想いのカップルか・・・」

「なんか、憧れちゃうな・・・」

そういうモンなのだろうか？

幼なじみカップルというのは、みんなの憧れなのだろうか？

オレにはよくわからないが。

そんなこんなであつという間に休み時間は終わり、軽井沢雅が教室に戻ってきた。

「みんな、席に着けー！！」

オレ達は慌ただしく席に着いた。

「えー、今日は特別活動を行う。5人ずつで1つのグループを作ってくれ。」

オレは即、篤子を誘った。

その後、笠美、畑中、青木もやって来た。

他のヤツらも次々とグループを作っていく中、朝霧哀だけが1人ポツンと席にいる。

心細いのだろうか？

それとも引つ込み思案？

何にせよ、1人しておくワケにはいかないだろっな。

オレ達は、朝霧の席に歩いていった。

「朝霧君。」

「ん？」

「小生達とグループを組みませんか？」

「オレなんかでいいのか？」

「ああ、もちろん。」

「大歓迎や！！」

「し、しかしオレは・・・」

「つべこべ言わずに、さっさとこっち来い。」

そう言つて、オレ達は朝霧を引っ張ると、席を6つくっつけ、それぞれ着席した。

こうして、5人×10＋オレ達6人の、計11グループができあがった。

FILE08：11個のグループ分け（後書き）

登場人物説明その01

名前 藍沢桜

年齢 15歳

誕生日 8月23日

実家が果樹園という、植物に詳しい男。

食堂のメニューの材料は、ほとんど彼の実家から仕入れている。

FILE 09：柏少年探偵団誕生

オレ達は、軽井沢雅の指示により、5人ずつの計11グループ（オレ達は6人）に分けられた。

「えー、このクラスは明日岡が説明してくれた通り、将来探偵志望の者達を集めたクラスである。したがって、これから先オマエ達が遭遇するさまざまな事件は、今分けた11グループそれぞれで解決していく事となる。それでは、グループごとにチーム名を発表しろ！！」

真っ先に手を上げたのが、綾小路梨華だった。

「『綾小路梨華とその下部達』ですわ。オーホッホッホッ！！」

よくよく見れば、綾小路のチームは彼女以外全員男子である。

「アホか・・・」

「バカね・・・」

オレと篤子は、心の中でそう思っていた。

そんな事はさておき・・・

他のみんなも、次々にグループ名を発表していく。

中には、明らかに某有名少女マンガや推理マンガの受け売りと思われる名前もあった。

そんなこんなで、いよいよオレ達のチーム名発表まで、あと1チームと迫ったのだが・・・

オレは大変な事に気がついた。

まだ誰も、ウチのチーム名を考えていなかったのだ！！

「次！！」

あああああゝ！！

ついに来てしまった・・・

まだ何も考えてねえよ・・・

どうする？

教卓の前に6人立ったのはいいものの、篤子も笠美も畑中も青木も、さらに朝霧でさえ緊張でカッチーンと固まってしまっている。

どないすんねん、おい！！

つい、関西弁が出てしまった。

あゝ、ちくしょう！！

こうなったら、あれだ！！

「ボク達のチーム名は『柏少年探偵団』です。」

あああああゝ！！

言っちゃまったよ・・・

終わった・・・

と思ったら・・・

クラス全体から、暖かい拍手が起こった。

そしてこの時こそ、のちに柏大学付属高校を救う事になる、柏少年探偵団誕生の歴史的瞬間であった・・・

FILE 10：疑惑の朝霧哀！？

「じゃあ、本日はここまで！探偵はいつ事件に遭遇するかわからんぞ。気を引き締めておけ！」

「はい！！！」

「それでは、解散！！！」

そして、下校の時間になった。

「スウ、スゴかったよ！あんないい名前、よく思いついたねー！」

「あ、ああ・・・あれはたまたま・・・」

「たまたまにしては、なかなかよかったと思いますよ？」

「そやね！」

「だな！」

「そういや、最近物騒な事件が増えたなあ・・・」

「うん、ネットでさんざん叩かれて、拳げ句の果てに人殺しちゃった人とかいるってニュースで聞いたよ。」

「小生ね、思うんですが・・・叩く方も悪いと思うんですが、それに逆上して殺人を犯す人はもつと愚かだと思うんですね。」

「そやね、けつきよくケンカ両成敗やろ・・・」

「オレは、ちがうと思うんだ・・・どんなに理由があろうとも、人を殺めるのは悪い事だと思ってる。だからこそ、オレ達が事件を解き明かさなきゃいけないって思うよ。」

「うん、スウの言う通りだよ！」

「同感！！！」

笠美、畑中、青木が、同時に返事をする。

スウは、少し微笑んだ。

「そういや、朝霧はどうした？」

「そういえば、授業が終わった後そそくさと帰っちゃったけど・・・」

「なーんか、怪しいな・・・」

「ヤツの事、少し探ってみないか？」

「課外授業ってワケですね。小生は賛成ですよ。」

「ウチも！」

「そんじゃ、そろそろコイツの順番だな。」

スウはそう言って、一冊の本をカバンから出した。

「コイツはオレのじいちゃんが昔作ってくれた、本型追跡装置だ。

アイツの事が気になって、今日アイツを引っ張った時にビー玉型発信機をズボンに入れといたんだ。」

スウは本型追跡装置を開き、スイッチを入れた。

ピポッ・・・

「ここから5キロ先の廃墟病院にいるな・・・」

「じゃあ、早くそこに行こう！」

篤子達は、次々に走り出していく。

スウは少しだけ不安を感じながら、篤子達の後を追った・・・

FILE 11：消える仲間達・1

「さて、目的地には着いたが・・・どういふ風に行く？」

「やっぱり、別れて捜査した方がええんとちゃう？」

「そうだな、じゃあボクは先に行くよ。」

「そう言うのと、笠美が真っ先に消えた。」

「お、おい、笠美！！」

「それで？君はどうするのです？青木君。」

「ウチ1人じゃ、怖い・・・」

「じゃあ、小生がご同行いたしましょう。明日岡君、そちらは頼みましたよ。」

「あ、ああ・・・」

そして、畑中と青木も消えた。

「・・・」

「ほら、スウ！アタシ達も行こうよ！」

「あ、ああ・・・そうだな・・・」

スウと篤子は、病院の中へと入っていった。

「う、薄気味悪いね・・・」

篤子はさつきから、スウにしがみついたままだ。

「ったく・・・怖いんなら外で待ってりゃよかったのに・・・」

「1人になったら、余計に怖いよ！！」

「あまり大声出すなよ。他に人がいたらどうすんだ・・・」

・・・と、その時・・・

「うわあああああああ！！」

「何！？今の声・・・」

「笠美だ！！行くぞ、篤子！！」

スウと篤子は、走り出した。

「あ、明日岡君！」

「篤子ちゃんも一緒か！」

「畑中、青木！」

「笠美君は・・・？」

「どこにもいないんですよ・・・」

「ウチらが叫び声を聞きつけてきたら、ここにこれが・・・」
そう言つて、青木はその何かを拾い上げた。

「お、おいそれ・・・笠美がかけてたメガネじゃねえか!!」
「笠美君、どこに消えたの・・・？」

スウ達は、しばらく立ち尽くした・・・

FILE 12：消える仲間達・2

スウは笠美が消える直前までかけていたメガネをつかみ、齒ぎしりした。

「笠美君、いつたいどこに消えたの・・・？」

「今の段階では、まだ何とも言えませんが・・・」

「とにかく、ここから先は2人で行動するしかない。篤子、オレから離れるな。」

「うん。」

「青木さんも、小生から離れないように。」

「わかった。」

「じゃあ、また後で落ち合おうぜ。」

「無事に再会できる事を祈ります。」

「じゃあね。」

畑中と青木は、そのまま走っていった。

「ねえ、スウ・・・」

「ん？」

「笠美君、無事だよな？」

「あつたり前だろ！そんな簡単に人が消えてたまるかー！」

「そうだよな・・・」

「笠美もそうだが、朝霧の行方もまだつかめてない・・・」

「いつたい、どこにいるんだろうね。」

すると、その時・・・

「うわあああつ・・・」

「キヤアアツ・・・」

遠くから悲鳴が聞こえてきた。

「今の、畑中君と雅子ちゃん!!」

「や、やられた!!」

スウと篤子は走り出した。

「畑中のクツ・・・」

「雅子ちゃんのもあるよ・・・」

「くそっ!!」

スウは拳を床に打ちつけた。

「チクシヨウ・・・」

「とうとう、アタシ達2人だけになっちゃったね・・・」

「ああ・・・篤子。絶対に・・・オレから離れるな。」

「うん・・・わかった・・・」

スウは篤子の腕をつかみ、足早に走り出した。

その後ろで、何者かが密かに彼ら2人を監視していた・・・

FILE 13：消える仲間達・3

「笠美に続いて、畑中と青木まで消えた・・・篤子・・・これから先は、絶対にオレの手を放すなよ！」

「うん・・・わかってる・・・でも・・・もし危ない目にあったらどうしよう・・・」

「大丈夫だって！何かあつたら・・・」

「うん！アタシ、心配なんかしてないよ・・・いざとなつたら、スウが守ってくれるもんね！」

「あ、ああ・・・まあ・・・」

「アタシは、スウのそんなところが好きになつたんだよ！」

「ったく・・・そういう恥ずかしい事平気で言ふなよな・・・」

「ウフフ・・・」

その時、ヒンヤリと冷たい空気が流れてきた。

「う・・・寒い・・・トイレに行きたくなっちゃった・・・」

「じゃあ、トイレの前で待っててやるよ。」

スウはトイレのドアの横に立ち、篤子が出てくるのを待った。

しかし、いつまでたっても篤子は出てこない。

スウはてつきり、篤子のトイレが長いだけだろうとタ力をくくっていたのだが・・・

数秒後、その安心感は打ち砕かれてしまった。

「キャアアアアー!!」

「篤子!？」

トイレの中から、篤子の悲鳴が聞こえてきたのだ。

「し、しまった!!!」

スウがトイレに乗り込んだ時には、篤子の姿は影も形もなくなって

いた。

「チクシヨウ・・・!!」

スウは拳をふるわせたが、すぐに落ち着いた。

なぜなら、篤子が入ったと思われるトイレの壁が、少しだけズレていたからだ。

「もしかして、これは・・・」

スウは長年の感から、すぐにその壁が隠し扉だとわかった。
ガコツ・・・

「やっぱりな・・・」

スウが思ったとおり、その壁の裏には空間が広がっていた。
ペンライトをつけてみると、うつすらと階段が見えた。

「・・・って事は、だ・・・」

スウはある事を確信し、あの場所へと向かった。

FILE 14：事件の解決へ

スウは考えを見だし、ある場所に向かった。

「！」

スウは足を止めた。

「やっぱりな・・・」

スウは全てを確信した。

「出て来いよ・・・そこにいるんだろ？」

スウが叫ぶと、朝霧哀が隠し扉から出て、オレの前に現れた。

その腕には、手足をロープで縛られ口をガムテープで塞がれた篤子が抱えられている。

「ん、んう！！（ス、スウ！！）」

「動くなよ、明日岡・・・この女を殺されたくないや、おとなしく・・・」

「もういい加減、ヘタな芝居は止めようぜ・・・そうだろ？逃走中の銀行強盗さん？」

「な・・・」

「（え？）」

篤子はキョトンとしている。

まあ、それも当然か・・・

「な、何言ってるんだ！？オレが銀行強盗なワケ・・・」

「とぼけんなよ・・・もうネタは上がってるんだ！！オレがアンタの事を疑うキツカケになったのは、クラスでの自己紹介の時だ・・・アンタ、『自分は朝霧哀。それ以上でも、それ以下でもない』って言って、出身中学校名も言わなかったよなあ？それでわかったんだよ・・・迂闊にしゃべったら、正体がバレちまうからなあ！！」

「グッ・・・」

「まあ、偶然アンタの顔を見ちまった本物の朝霧哀をこの廃墟病院に閉じ込めて、後で始末する気だったんだろーが・・・詰めが甘か

つたな！銀行強盗さん？」

「ク、クッソォー！！！」

男は簞子を投げ出し、スウの方に向かってきた。

ダダダダダ・・・

「アホか・・・」

スウはそう言つと、男の目に見えない速さで鉄拳をぶち込んだ。
ドドドドド！！

「オマエはもう、気絶している。」

スウがそう言つた瞬間、男はドサツと倒れ込んだ。

スウは簞子に駆け寄ると、縄とガムテープを解いた。

「簞子、大丈夫か？」

「うん・・・」

「一件落着・・・か。」

その後、スウが電話で呼んだ警察が到着し、男は逮捕され・・・

朝霧、笠美、青木、畑中の4人も無事に地下室から助け出した。

こうして、彼ら柏少年探偵団の記念すべき第1の事件は幕を閉じたのだった。

5人の探偵業は、まだ終わらねえ！！

FILE 15：いきなり呼び出し！？

二セ朝霧の事件から3日後・・・

オレ達は何事もなかったように、学校へと通っていた。

もつとも、被害者の朝霧は少し衰弱していたので、1日検査入院して再び学校へと戻って来た。

「改めて自己紹介いたしまっす。小倉橋^{おぐわはし}中学校から来た朝霧哀です。以後よろしく〜！」

「よろしく〜！」

朝霧の自己紹介に、オレ達4人は目を丸くした。

「（朝霧って、こんなにテンション高いヤツだったのか・・・）」
オレと篤子、雄也、葉平、雅子の5人が、5人共全く同じ事を思っていた・・・

「あ、そうそう明日岡！放課後校長先生が校長室に来てっさ。」

「え？」

オレ、何かしたっけ・・・？

「あ、そうそう、浜谷さん達5人も来いだってさ。」

「はへ！？」

オレ達6人は、廊下をゆっくり歩いていた。

「うーん、オレ達何かしたっけ・・・？」

「イヤ、絶対何もしてないわ！誓って何もしてない！！」

「同感だ・・・」

「ウチもや・・・」

「じゃあ、なんでこんな大勢でそろそろと行くんでしょね・・・」

「さ、さあ・・・」

しばしの沈黙・・・

「ところで、朝霧・・・」

「ん？」

「オマエって、あんなにテンション高いヤツだったんだ・・・」

「意外？ボクはこれでも普通のつもりなんだけどなあ・・・」

「（イヤイヤ、全然普通じゃねえよ（じゃないわよ）（じゃありませんよ）（とちゃうよ）！だって（そやかて）ギャップが・・・）」

「（そういえば、あん時の朝霧は銀行強盗が化けてたんだっけ・・・これが本来の朝霧哀なんだな・・・）」

オレは一応納得した。

そんな話を話してる間に、いつの間にかオレ達は校長室に着いていた。

FILE 16：最初の依頼『1』

そんな話を話している間に、オレ達は校長室に着いていた。
落ち着け・・・

オレ達は何もしていない！

普段通りにしていれば何も問題は・・・

ないのか・・・？

いざ・・・

意を決して、オレは校長室の扉を開けた。

「待っておったよ、浜谷篤子君、笠美雄也君、畑中葉平君、青木雅子君、朝霧哀君、明日岡スウ君・・・どうした？」

校長が不審に思うのも無理はない。

オレ達全員、緊張しすぎてカッチーンと固まっているからだ。

「あの・・・オレ達何か悪い事しましたっけ・・・？」

「とんでもない。君達はむしろほめられる方だよ。逃走中だった銀行強盗を逮捕したんだからね。」

「ハ、ハハ・・・まあその通りですが・・・」

「そこで・・・だ。君達には他のグループより先に任務を与えようと思う。お金持ちのある家に脅迫状が届いたのだ。君達にはその家の警護、並びに犯人逮捕を努めてもらいたい。できるかね？」

「はい、もちろんです！！」

やっとこの学校らしくなったか・・・

そんなワケで、オレ達は依頼人の家に向かう事となった。

「ここが依頼人の家か・・・大きいな・・・」

「でもこの家の表札に書いてある名前、どこかで見たような気がするのですが・・・」

「どこで見たんやる？」

「ふあゝ、今日も1日疲れましたわ・・・って、どうしてあなた方がここにいますの？」

「え？」

振り向いたオレ達の目線の先にいたのは、なんと・・・

「綾小路！？なんでオマエがここにいる！？」

「なんでって・・・ここは私^{わたくし}の家ですわよ。」

「へ？」

オレ達は表札をよく見てみた。

『綾小路』

ああ、そういう事ね・・・

ああ・・・

またなんか事件が起こる気がしてきた・・・

これも探偵のカンなのか？

そう思いながら、オレ達は綾小路家に入っていった。

FILE 17：最初の依頼『2』

オレ達は執事らしき人に案内され、綾小路邸の中を歩いていた。

「うわゝ、中也広いわね……」

篤子の率直な感想だ。

「小生のデータによると、彼女は綾小路財閥のご令嬢で、とても父親にかわいがられているそうですよ。」

葉平がメモ帳を開きながら言う。

「そうか。通りで横柄な……」

「ウチの嫌いなタイプやな……」

どうも雅子は、綾小路のようなタイプの女が嫌いらしい。

気持ちはわからなくもないのだが……

そんな事を言ってる間に、一番重要だと思われる部屋に着いた。

オレ達は中に入っていく。

「これが予告状です。」

執事さんから予告状が手渡される。

オレ達は予告状を注意深く読んだ。

『^み明日^ち夜8時、

^{みどりいろ}翠色・金色・

紅色・純紺色の宝石を

頂きに参上する

怪盗鳳鴉』

見たところ特に普通の予告状と変わらないが、気になったのは差出

人の名前だ。

「怪盗・・・鳳鴉？」

『おおとりがらす』というのが読み方だろう。

やけにけつたいな名前の怪盗だな・・・

オレの第1の感想はそれだった。

オレ達は泊まり込んで警備を手伝いをするため、それぞれ泊まる部屋を用意された。

部屋割りには、

オレと篤子

葉平と雅子

哀と雄也

である。

とりあえず、守ればいいんだ、守れば・・・

何も起こらない事を祈ろう・・・

オレはそう思ったが、何かが起こるのが事件というものだ。その時は信じられなかった。

まさか、あんな事が起こるとは・・・

FILE 18：最初の依頼『3』

オレが部屋で考え込んでいると、散歩に出ていた篤子が戻って来た。どうやら、夕食の用意ができたらしい。

しかし、オレは考えたい事があったため、『食事は部屋に持って来させてくれ』と篤子に頼んだ。

すると、篤子も部屋で食べると言い出した。

その事を伝えに行かせたオレは、少し考え込んでいた。

怪盗鳳鴉・・・

ヤツの目的は、一体何なんだ・・・？

考えていても推理が全く進まない。

しょうがねえ。

とりあえず、夕食を食べてからにするか・・・

持って来てもらった夕食を食べた後、オレと篤子は妙に眠くなった。別に料理に睡眠薬が入っていたとか、そういうものではない。ただ単に寝たくなっただけだ。

そんなワケで、オレと篤子は眠りについた。

朝早く起きて、食堂に行ったオレ達だったが、何だかあわただしい。綾小路によると、父親がまだ部屋から出て来てないらしい。

ったく、つくづく世話の焼けるオヤジだな・・・
オレ達は、綾小路の父親を起こしに向かった。

そして、起こしに行った部屋で衝撃的な事が起こった。

なんと、嚴重に密室にされた部屋の中で、綾小路の父親が後頭部を殴られ倒れていたのだ。

って言うっても、カギが掛かっていたのでオレが窓から中をのぞき込んだのだが。

ドアをブチ破り、オレは綾小路の父親の元に歩み寄る。

篤子達が、彼はどうなったのかと聞いてくる。

オレは脈を確認すると、静かに首を横に振った・・・

FILE 19：最初の依頼『4』

事件発生後、警察は結構早く来た。
それはそうだ。

綾小路の家に着いた時、オレが既に警察を呼んで付近を見張らせていたのだからな。

え？

なんでオレにそんな権限があるかって？

それについては、来ている刑事に説明してもらおう事にしよう。

「さて、あしたおか君。事件について話してくれるか？」

「そりゃ、今までと同じくちゃんと協力するけどさ……いい加減にオレの名字覚えてくれねえか？中嶋警部。」

「ス、スマン、明日岡君。この所君に会ってないから、ついな……」

「
オレに謝ったこのオッサンが、なかじましげつぐ中嶋茂次警部。

初等部の頃から世話になつてる刑事だ。

つつても、ただ事件解決に貢献してるだけだな。

「ワザとだったら、オヤジに報告するよ、中嶋さん？」

「そ、それは勘弁してくれ……」

中嶋警部は謝った。

さて、なぜオヤジの事を聞いて警部が謝ったのかというと、オレのオヤジは警視庁の鬼警部だからだ。

ちなみに、オヤジはオレと名字が違い、みやそのよしひろ宮園義啓という。

その理由は、親子である事で捜査が不利になる事も多いからなのだとはいえず、現場検証が始まった。

部屋はドアにカギが掛かっていて、完全な密室。

しかもそのカギは、部屋の中にある分厚いノートの下にあったのだ。さらに、本棚が倒れている。

普通の人なら、こんな状況では自殺か事故死だと思うだろう。

しかし、オレはそうは思えなかった。

明らかにこの部屋は不自然だったからだ。

そういえば、ご主人の指が示す先に、なぜかマンガがあったな。タイトルは確か、M：A R。

週刊少年サンデーで連載されていたマンガだ。

なぜ、ご主人の指はマンガを指差していたのだろうか？

謎はさらに深まりそうだな・・・

FILE 20：最初の依頼『5』

「おい、聞き込みは終わったか？」

中嶋警部が後ろを向いて叫ぶと、有能そうな刑事が走って来た。

「はい、中嶋警部！関係者への聞き込み、一通り終えまし・・・たわっ！」

ズッ！

ドテッ！

その人は急につまずいてコケた。

「コケた・・・」

「コケたわね・・・」

「コケたな・・・」

「コケましたね・・・」

「・・・大丈夫か？江菜・・・」

「はい、大丈夫です・・・わっ！！」
バタッ！

・・・またコケた・・・

この刑事さん・・・

有能そうに見えるけど・・・

間違いなく天然だ・・・

「・・・と、このようにコケまくっているが、コイツがオレの部下、
女刑事の江菜弓^{えまつ ゆみか}香だ。」

「初めまして！中嶋警部の部下の江菜です。よろしく願いします。
・・・わっ！！！！」

ドシャッ！！

またしてもコケた・・・

この女刑事さん・・・

やっぱりどう考えても天然だ・・・

「で？どうだった？」

「はい。事件当夜、屋敷にいたほとんどの人にアリバイがありました。ですが、アリバイが曖昧な人が3人いました。」

「ほう、それはどいつだ？」

「執事長をしている稲垣直久さん、メイドの西風芳香さん。後1人は・・・綾小路梨華さんです・・・」

オレ達は、少し表情が曇る。

綾小路まで容疑者なんて・・・

まさか、アイツが・・・？

オレは一瞬そう考えたが、すぐに自分の頭をゴツンと叩いた。

バカな、一瞬でもオレは何を考えてるんだ！？

綾小路が犯人なワケないだろ？

彼女はきつと、オレ達が解決してくれるのを待っている。

だったら、オレがこの事件の真相を解き明かしてやるぜ・・・

この世に解けない謎なんて・・・

チリ1つだってありはしないんだからな！！

FILE 21：最初の依頼『6』

オレが必ず、この事件を解き明かす・・・

そう心に決めたオレだったが、わからない事が多すぎる。

何だって、事故死に見せかける必要があっただんだ？

それに、被害者が握っていたこのマンガ・・・

何か意味があるのか・・・？

まあ、何か意味がなければこんな物を握るワケがないか・・・

オレはそう思いながら、そのマンガを手に取った。

パラパラとページをめくっていたオレだったが、あるページで手が止まった。

「ん！？（何だ！？この血は・・・既に乾ききっている・・・）警部！」

「何だね、スウ君？」

「この血痕のDNAが誰なのか、大至急調べてくれ。と、その前に・・・青木！」

オレは青木を呼んだ。

「何や、明日岡君？」

「このページに記されている物を瞬間記憶で記憶しといてくれ。これから警部達にこのマンガを調べてもらってから、しばらく触れなくなる。」

「オツケー、任しとき！」

そう言うと、青木はマンガを食い入るように見つめた。

「終わったで。」

「早っ！！」

「ウチの瞬間記憶は、一瞬見ただけで全部覚えられるんや。」

「そ、そうなんだ・・・じゃあ警部、頼みます。」

「わかった。」

中嶋警部は、部下と共に部屋を出ていった。

さて、オレにもやる事があるな。

オレはカギが隠れていたノートをくまなく調べた。

しかし、どこも変わったトコはない。

あれ？

このノート、やけに裏の厚紙がしっかりしているな・・・
待てよ？

確か前に某有名マンガで読んだぞ！

これと全くよく似た状況を！！

確か、確か・・・

オレは少し考えると、不適な笑みを浮かべた。

そうか、わかった！

やつと思い出したぞ・・・

なーるほどね・・・

そういう事だったか・・・

だったら、あのマンガで血がついていたページの意味は・・・

「青木！血痕がついていたページには、何て記してあった？」

「ん？確かなあ・・・」

青木からページに記してあった物を聞いた事で、全ての複雑な系が
1本につながった。

やつと解けたぜ！

この事件のトリックがな！

後は、警部からの鑑定結果を聞くだけだ・・・

あれ？

そういえば、綾小路はどこに行ったんだ・・・？

オレは辺りを見渡した。

い、いない！

消えてやがる！

まさか、犯人が！？

そんな事を考えていると、警部が戻って来た。

警部から鑑定結果を聞き終わったオレは、即座にある場所目指して

走り出した・
・
・

FILE 22：最初の依頼『7』（前書き）

この事件のトリックは、『名探偵コナン18巻』のトリックを参考にしています。

あらかじめご了承ください。

FILE 22：最初の依頼『7』

オレは事件の真相に気づき、ある場所に向かった。

それは、被害者の部屋だった。

「明日岡君、なぜ被害者の部屋に戻ったんだ？」

「気づいたからさ・・・事件の真相にね。今からここでやってみせるよ・・・」

そう言くと、オレはトリックを実演した。

「おお・・・」

オレのトリック実演に、中嶋警部達は感心した。

「で、このトリックをやったのは誰なんだ？」

「今から行くよ。その人の所に・・・」

オレはその人の部屋に着くと、ノックした。

「はい・・・あら、探偵さん方・・・どうしたんですか？」

「ごまかすのはもう止めようぜ？わかってんだよ、アンタが犯人だつて事は・・・そうだろ？綾小路家メイドの・・・西風芳香さん？」

「・・・」

芳香は沈黙する。

「な、なぜ私が犯人になるんです？あの部屋は密室だったのでしょう？？」

「確かに密室だったよ、あの部屋は・・・だが、そのトリックはも

う解けた・・・カセットテープとチェスのポーンの駒、そして厚紙がしっかりしたノートを使った、某漫画のトリックをな!!」

「・・・!!」

「アンタはおそらく事件前に綾小路さんと何かしらの事で会っていったんだろう。そして、ある原因で思わず撲殺してしまったんだ・・・運良く漫画のトリックを思い出し、密室にする事はできたし、手袋もつけて指紋を残さず、完璧だと思ったんだろうが・・・被害者は残していたんだよ、死の間にアンタを指し示すダイイングメッセージをな。それは・・・この漫画だ。」

そう言くと、オレはM：ARという漫画の単行本を取り出した。

「この本のあるページに血がついていたんだよ。そしてこのページには『ゼピュロスブルーム』という名の：ARMが載っている。もうわかるよな？これが何を指し示すのか・・・」

「ゼピュロスブルームは『西風の水ウキ』・・・私を示すダイイングメッセージってワケね・・・負けたわ・・・」

「それに、部屋の中のどこかに閉じ込めてるんだろ？綾小路を・・・」

「

オレが言つと、芳香はクローゼットを開ける。

そこには、眠らされた綾小路がいたのだった。

FILE 23：最初の依頼『8』

クローゼットから、綾小路が見つかった。

綾小路は睡眠薬を嗅がされていたらしく、スースー眠っている。

「綾小路さんを殺害した動機は何なんだ？」

「お嬢様をお守りするためなのです。今の旦那様は2番目の亭主様なのですが、毎日のようにお嬢様や私に虐待を加えていました・・・あんな疫病神に、あの人の大切なお嬢様がイジメられるのが耐えられなかったんです・・・」

「あなたの事は調べさせてもらったよ。あなたは前の旦那様の妹なんだってな。」

「はい、そうです。それと今の旦那様は兄の元同級生でした・・・私は兄から頼まれたのです。『娘を守ってやってくれ』と・・・お嬢様を守るためなら、私は・・・」

「確かに、アイツは調べによるとろくでもないヤツだった・・・だからって、殺して良いって事にはならないんだよ。西風さん・・・人の命は大切なんだ・・・例え、どんなヤツでもな・・・」

「そうですね・・・」

その後、警察の調べで事件当時綾小路の義理の父が西風さんを殺そうとしていた事が判明し、ナイフで切られたという証言から西風さんは正当防衛だと見なされ、罪も綾小路を監禁した事だけが問われる事となり、少しだけ軽くなった。

とはいえ、少なくとも半年は出られないらしいが・・・

綾小路はあれから毎日面会に行っている。

1日も早く、また西風さんと過ごせる事を夢見て・・・

さて、最初の依頼も完了した所で、そろそろオレと篤子の秘密を明かしておこうか。

なぜオレと篤子が、中嶋警部に一目置かれているのかを・・・
それは、オレと篤子が小学5年生の時の事だった・・・

FILE 24：ファースト・コンタクト（最初の出会い）『1』

「さっきこの道通ったで。」

「もう4時間も歩いてるのに・・・ねえ、本当にこっちで合ってるの？スウ！！スウ？もう・・・すぐどこかに行っちゃうんだから・・・」

「おおおい！！早く来ないと、置いてくよー！！イヤッハアアアアアッ！！」

スタツ！

「へへ！あの超有名な推理作家、中嶋轟蔵に会えるんだ。ワクワクしちゃうよ！早く来ないと置いてくよ！」

「ウチも全巻読んでるで！」

「ちよつ、ちよつと待ってよ！」

「ここか・・・」

『中嶋轟蔵 推理作家』

「・・・」

「（こ、この人がそうか・・・）」

「（怖そうなおジサン・・・）」

「フ・・・アッハッハッ、コイツは傑作だ！君らがあの有名な少年探偵部下。どんなクソ生意気なガキかと思ったが・・・何だ、普通の子じゃないか！！」

ガシ！

「私も孫を見てるようで安心するよ。それにひきかえ、我が子達と
きたら・・・」

「そうそう、その子供達にあなたが・・・」

ボタン！

ナカジマシゲツグ

『中嶋茂次 中嶋家次男 警視庁捜査1課警部』

「探偵を呼んだんですって、父さん！？それでも私は警視庁の警部
なんですよ！？それを差し置いて・・・」

「バカモン、来客中だ！！」

「フン、ただのガキじゃねえか・・・全く。」

ボタン！

「子供達がここへ集まったのは、私の遺産相続の件だ・・・自分で
言うのも何だが、私は推理作家として大成功し、巨万の富を得る事
ができた・・・それで子供達ときたら、私の顔を見る度に金金金。
だが、私はあんなバカ共に遺産をやる気はないんだ。つまりだ・・・
ヤツらは私が遺書を書く前に、私を殺す気なんだよ。その時こそ、
君達の出番だ。」

「はい・・・」

「父さん、ボク達という立派な子供がいるというのに、遺産を寄付
するとは何事です！？」

ナカジマイチヨウ

『中嶋一葉 中嶋家長女 医者』

「病院の経営には、お金が必要なのよ！！」

ナカジマコウソウ

『中嶋孝二』

「それはボクも同じだ。」

「オイコラ、オレ抜きで話を進めるな！！」

「うるさい、オマエは引っ込んでろ!!」

「ちよっと、オジサン達、さっきからお金お金って・・・それじゃ、オジサンがあんまりだわ・・・」

「フワァ・・・そんで？誰がジイサンの命を狙ってるの？」

FILE 25：ファースト・コンタクト（最初の出会い）『2』

「そんで？誰がジイサンの命を狙ってるの？」

「・・・」

「まあ、お父様が妙なウワサを流して・・・」

「わからんぜ、誰かさんは新しい家買って金に困ってらっしゃるか
ら。」

「アンタこそ、金融会社に借金してるじゃないのよ！！」

「オレは市民を守る刑事だぞ。殺すなんて、警視庁の名誉を阻害する
ような事・・・とんでもない。」

「あゝ、わかったわかった。止め止め、もう止め！！晩ごはんにし
ようよ、ジイサン。」

「おう！」

「ガキの探偵ゴツコにも困ったもんだぜ。」

「あー、オジサン達？今晚は無闇に歩かない方がよいよ。何か起
きたら、疑われても文句言えないかね。」

「何で、私や真古みたいなレディーがスウと一緒に部屋なワケ！？」

「しょうがないだろ、部屋数が足らないんだから！」

「スウ、どう思う？本当に何か起こるかしら・・・？」

「まだ何とも言えないね。君はどう思うんだよ、篤子？」

「ううん、私もわかんない。でも・・・あのオジサン、何だか寂し
そうで・・・」

「そうだな・・・」

「バフッ！」

「ブワッ!？」

「油断は禁物やで、スウ！」

「何しやがる、真古!!！」

「何も起こらなきゃ良いけど・・・」

「遺産か・・・ん？おかしいな、1冊抜けてる・・・」

「ギヤアアアア!!！」

「!ヤベエ、寝ちまつた。」
ダッ!

「開けてくれ、ジイサン!どうしたんだ!？チイツ、カギが掛かってる・・・真古、頼む!!！」

「了解!!アアアア・・・ハッ!!！」

ドカッ!!
バッ!

「ジイサン!!！」

「どうしたんだ、今の悲鳴は!？」

「・・・!!！」

カチッ・・・

「大丈夫でしたか、父さん。」

スッ・・・

ドサッ！

「キャアアアア！！」

「す、すぐに応援部隊を・・・」

「待て！誰もここから出るな！！」

「な、何？」

「誰もここから出るなど言っているんだ！この部屋は完全な密室になつていた！！警察を呼ぶ必要はない！！」

「な・・・これでもオレは警視庁の警部なんだぞ！探偵ゴッコはもう終わりだ！！」

ガッ！

「・・・！け、警視バッジ！？な、何だ・・・何なんだ・・・！？オマエら、一体何なんだ！！？」

バッ！

「ボクは警視庁捜査秘密課、明日岡スウ警視正だ！！」

「私は警視の浜谷篤子！！」

「ウチは警部の保安真古や！！」

「け、警視庁・・・」

「捜査・・・」

「秘密課！？」

「ウワサには聞いた事がある。東京都公安委員の特殊捜査チーム！
！『裏の警察』とも呼ばれるあの・・・！？」

「これからは、ボク達の指示に従ってもらふよ、警部！！」

FILE 26：ファースト・コンタクト（最初の出会い）『3』

「まず、現場の状況から考えてみよう。ご覧の通りこの部屋には窓が一切ない。そして中から鍵が掛かっていた。つまり、密室というワケだ！」

「自殺の線はないのか？」

「ないね。おじいさんはナイフのような物で刺殺されているが、凶器は未だ見つかっていない。」

「自殺してから凶器は隠せへんよ。」

「やっぱり我々だけじゃ無理だ！応援を呼ぼう！」

「その必要はないね。」

「一体どうなってるの！？」

「落ち着いてくださいよ。こんなもん、トリックでも何でもありません！」

「じゃあ、オマエにはわかるのか？」

「もちろん！少なくとも、密室の謎についてだけはね。」

「つまり、犯人は私達がこの部屋に入った時点で、まだこの部屋の中にいたのです！」

「皆さん、この部屋に来た時、誰と一緒にでした？」

「あわててたんで、覚えとらん！」

「ボクも。」

「私も。」

「でしょ？つまり犯人は他の人と一緒に来たフリをして、ドアの影からコッソリ出て来たってワケ！つまり・・・この中に犯人がいる！もちろん、ボくら3人を含めた全員の中に！」

「この中に犯人がいるのはわかった。しかし、どうやって殺されたんだ？」

「そう、凶器はまだ見つからない。それどころか、その凶器が何であるかすらわかってない。それが今回の事件の最大の謎ってワ

「ケか・・・」

「そうだ、凶器がなければ犯行は立証できないぞ！」

「念のために、全員の身体検査だ。」

「よし、これで全員終わりだな。」

「ついに何も出て来なかったわね。」

「イヤ、コイツは医者なんだ。メスぐらい持つてるハズだ!!」

「あなただってナイフのコレクションしてたでしょうが!!」

「ケツ！凶器が出て来ないんじゃないやねえ・・・刑事さんがそろいもそろって全く・・・」

「ケンカは止めえや。」

「ドカツ！」

「わゝ！」

「ドタン！」

「？あれ？12巻目だけ抜けとる。12巻目・・・？」

「（密室である以上、凶器はこの部屋のどこかにあるハズだ・・・どこだ？凶器を隠せる場所・・・）」

「ガシャ！」

「？」

「ピチャーン！」

「？」

「ちょっと止めてください、おじさん達。ねえ、スウ！何とかしてよ。ねえ、スウ・・・ス・・・。」

「わかったぞ!!」

「・・・思い出した・・・」

FILE 27：ファースト・コンタクト（最初の出会い）『4』

「見つかったのか、凶器が!？」

「いいや。凶器はもう、この世のどこにもない。ボクが見つけたのは、昔凶器だった物の成れの果ての姿だよ。」

「良いから早く話せ!!」

「良いでしょう。初めから説明します。この部屋には争った形跡がない。つまり、顔見知りの犯行だ。そして犯人はカギを掛け、ドアの影に隠れた。」

「でも、その時既に犯人は証拠の隠滅をしたのよ。」

「そう、犯人が凶器を隠した場所・・・それは、あのポットの中だ! ご覧の通り、カップには湯気が立っている。それなら当然このポットの中には、熱々のお湯のハズだ! 誰もぬるい紅茶なんか飲みたくない。ところが・・・」

チヨロロ・・・

「水・・・?」

「そう! でも、良く見てご覧よ。」

「赤い!? 赤い水だ!!」

「鑑識に回せばわかるだろうけど、おそらく血だね、これは。ここで問題! ポットのお湯を水に変え、さらに消えてしまう凶器とは何か?」

「氷か!？」

「ご名答! でもそんな物、冷蔵庫には入ってなかった。」

「そ、そうだ! 入ってなかったぞ!!」

「そう! 犯人は冷蔵庫を使わなかった。」

「イヤ、使えなかったんだ! 凶器をみんなの目に触れるような場所に置くほど、この犯人はバカじゃない。他に氷を保存する方法といったら何だろうか?」

「うーん、他にはクーラーボックスぐらいしか・・・クーラーボツ

クス！？」

「そう！！犯人はあなただ、孝三さん。」

「・・・」

「孝三さん、あなたここに釣りをしに来たんでしたね。」

「孝三、あなた・・・」

「そんな！クーラーボックスを持ってたぐらいで・・・ちがう、オレじゃない！ガキの推理なんかにだまされるな！！」

「鍵岡警部シリーズ第13作・・・消えた凶器の謎・・・今回と同じ、氷を使ったトリックや。たぶん、孝三さんのカバンの中にも入ってるんや。」

「うわあああ！！父さんが遺産を寄付するなんて言うから・・・オレにはどうしても、金が必要だったんだあ！！」

「良く思い出したな、真古！」

「全巻読んで言うたハズやで。」

「自分で考えたトリックで殺されるなんて、かわいそう・・・」

「これより、容疑者を連行いたします。明日岡警視正！！」

「・・・ごくらう！」

「ホームズ、お礼に今度昼食でも奢ってやるぜ！」

警視庁捜査秘密課の特殊捜査チーム。

その推理力は天才的と言われている。

だが、彼らの存在を知る者は少ない・・・

FILE 28：かつての仲間へのお見舞い

スウは柏中央病院に来ていた。
ある病室まで足を運ぶ。

そして、その病室のドアを開けた。

部屋のベッドには、1人の少女が静かに寝ていた。

「また来たぜ・・・真古・・・」

スウは少女に話しかけた。

ベッドで寝ている少女の名前は、保安真古。

スウや篤子の幼なじみで、警視庁捜査秘密課のメンバーの1人である。

なぜ彼女が病院に入院しているかというところ、真古はかつてある犯罪組織との戦いの時、体に重傷を負って手術を受けたからだ。

その後手術は無事成功したが、後遺症で彼女は植物状態になってしまったのである。

スウが真古のお見舞いに通っているのも、当時彼女がスウをかばって重傷を負ったからである。

「まだ目が覚めないか、真古・・・看護婦さんが定期的に水分を与えているようだけど・・・」

スウはそう言うと、病室を後にした。

スウが病院を出ると、篤子が立っていた。

「どうだった？真古の容態。」

「まだ目が覚めないみたいだ。」

スウは静かに言った。

「ねえ、この事件アタシ達じゃ力不足よ。笠美君達にも協力を頼まない？」

「止めた方が良く。オレ達が追っているヤツらは、アイツらじゃ荷が重すぎる。」

「そんなものかしら。」

「ああ。オレはもう2度と親友をキズつけたくはない。オレ達2人
あの事件を必ず解決してやるんだ。」

「そうね。あなたのそういうトコ、アタシは好きよ。」

篤子は笑顔で言う。

「フツ、嬉しい事言うねえ。」

スウも満更でもなさそうだ。

「そうそう、雅子ちゃんからメールが来てたよ。」

「青木からか。内容は何だつて？」

「畑中君と一緒に買い物に行ってたらしいんだけど、そこで不思議
な光景を見たそうよ。」

「不思議な光景？何なんだ？」

スウは顔をしかめながら言う。

「笠美君が、年下の女の子と一緒に歩いてたそうよ。」

「ヘエ？そいつぁ興味深い事だな。で、青木と葉平は今どこにいる
つて？」

「南柏町のカフェだつてさ。アタシ達も行く？」

「ああ。何か面白そうだからな。」

スウと篤子は、正子と葉平が待っているカフェへと向かった。

FILE 29：笠美と謎の少女を尾行せよ『前編』

スウと篤子が南柏町のカフェに入ると、葉平と雅子が席で待っていた。

「ようやく来ましたね。」

「待つとったで。」

「待たせたな。ところで、肝心の2人はどこにいるんだ？」

オレが素っ気なく聞くと、雅子は笑みを浮かべながら、

「このカフェの反対側にあるデパートで買い物しとう。」

とニヤつきながら言った。

「買い物が終わったら何か食べようかとか話していましたから、直にここに来るでしょう。そういうワケで・・・」

葉平はそこまで言うのと、袋から何かを取り出した。

それは、帽子とサングラスだった。

「これで変装してください。」

「ハア!？」

葉平の言葉に、スウはコケそうになった。

「何でオレ達に変装なんかしなきゃいけないんだよ？」

オレが聞くと、葉平はキョトンとして、

「そりゃ、そのままだと小生らだと彼にバレるからじゃないですか。」

「

葉平はシレッと言った。

まあ、確かにそうなのだが・・・

スウ達は、帽子とサングラスで変装した。

端から見たら、どっかの怪しい集団じゃねえか・・・？

スウは思った。

これにマスクもプラスしたら、完璧に悪者の格好だなと。

そんな発想が出た事に、スウは苦笑いしていた。

「あ！入って来たで。2人が。」

雅子の発言に、スウ達は反応した。

スウ達が入口の方を見ると、雄也が1人の女の子と一緒に店に入ってきた。

「（篤子には及ばないが、なかなか美人だな。ん？あの女・・・どこかで見たような・・・）」

スウは疑問を抱きながら、少女を見ていた。

果たして、この少女の正体とは・・・？

スウ達は2人に怪しまれないよう、料理を注文した。

雄也達2人も、料理を注文している。

30分ほどしてスウ達が食事を終わると、丁度雄也達も終わったところだった。

レジで会計を済ませ、カフェを出て行く。

スウ達は素早く会計を終えると、気づかれないように2人の尾行を開始した。

FILE 30：笠美と謎の少女を尾行せよ『後編』

カフェから出たスウ達4人は、雄也と謎の少女を尾行していた。よく見ると、少女は腕を雄也に絡めている。

「2人共、良い感じじゃないですか。」

葉平が微笑みながら言った。

「そやな。」

雅子も微笑んでいる。

「・・・」

スウが顔をしかめているのを見て、篤子が話しかけてきた。

「どうしたの、スウ？さっきから顔が怖いよ？」

篤子の言葉に、スウはハツとした。

「わ、悪い・・・彼女、どこかで見た気がして・・・つい、な。」

「フウン。」

スウの言葉に篤子が素っ気なく返事する。

スウ達が尾行している事に気づいているのか、雄也は速度を急に上げた。

「あ、速度を上げた。」

「気づいたんでしょかね。」

「見失わないよう追うで！」

スウ達は、見失わない程度について行った。

しばらく買い物やら何やらをして、雄也と少女は公園に着いた。

「ここがあなたのお気に入りの場所なの？」

少女が聞く。

「ああ。疲れた時は息抜きに来てるんだ。」

「そうなの・・・ねえ！携帯の番号交換しない？」

「番号？」

「うん。また連絡取りたいし。」

「そうだな。わかった。」

雄也と少女は番号を交換した。

「じゃあ、私はもう帰るから。」

「ああ、また会おうな。」

少女は足早に去って行った。

「さて、と。」

雄也は茂みの方をにらんだ。

「出て来なよ、みんな。」

雄也が言くと、スウ達が茂みから出て来た。

「タハハ、やっぱりバレてたか。」

「当たり前だよ。バレバレだったし。」

「それにしても、スウが言ってたどこかで見た気がするって言葉・

・妙に気になるわね・・・」

スウ達は、うなずきあっていた。

「ウフフ・・・面白くなりそうだね。」

あの少女が、自宅で不敵に笑っていた・・・

果たして、少女の正体とは・・・？

FILE 31：疑惑の転校生、桜菜！！

スウと篤子が登校して来ると、やけに教室内が騒がしかった。気になったスウは、近くにいた雅子に聞いてみる。

「青木、何なんだこの騒ぎは？」

「ああ、明日岡君。何でも今日このクラスに転校生が来るんやて。」

「このQクラスに転校生が？」

「ええ。何でも全教科満点のトップな上、飛び級で入って来るそうです。」

葉平も話に加わった。

「何い！？」

葉平のセリフに、スウと篤子は驚いた。

何しろ、このクラスに入るためのテストは超難関であり、満点を取ったのはスウと篤子の2人だけなのだ。

それなのに、その難関テストを満点合格した上に飛び級で入って来るとは・・・

「一体どんな子だろうね、スウ？」

「さあな。」

スウは口ではそう言いながらも、『まさかな・・・』という顔をしていた。

そして、彼の予感は的中する事になる。

ガラツと扉が開いて、雅が入って来た。

「オマエら、席に着けー！！」

スウ達は慌ただしく席に着席した。

「ホームルームを始める前に、転校生を紹介する。入って来い！」

「はい！」

再び扉が開くと、金髪の少女が入って来た。

その彼女の姿に、スウ達4人は思わず『あっ！！』と叫びそうになった。

なぜなら彼女こそ、先日スウ達が尾行していた笠美のデート相手だったからだ。

「自己紹介してくれ。」

「はい。」

彼女は返事すると、黒板に名前をサラサラと書いた。

成瀬 桜菜

「今日からこのクラスに転校して来ました、ナルセ ハルナ成瀬桜菜です。まだ14歳で若輩者ですが、皆さんに追いつけるよう精一杯努力していきたいと思いますので、皆さんよろしくお願いします！」
彼女の自己紹介に、クラスメート達は暖かい拍手を送った。
そんな中、スウ達5人は彼女を疑惑の眼差しで見つめていた・・・

FILE 32：中嶋からの協力要請

放課後になると、桜菜の元にクラスメイト達が集まって来た。

「桜菜さんって、どこから転校して来たんですか？」

「両親は何をしているんですか？」

「兄弟はいますか？」

「好きな人とかはいますか？」

口々に質問をするクラスメイト達。

そこにスウ達もやって来た。

「そんなに一気に質問したら、答えにくいやろ？」

突っ込みを入れる雅子。

「良いわよ。全部答えてあげる。アタシの生まれは青森、育ったのは長野。」

「リンゴの名産地と、スキーで有名な県ですね。」

葉平がメモ帳を開きながら言う。

「そうよ。次に両親の事だけど、アタシには母親がいないの。アタシが8歳の時に亡くなったわ。」

「父子家庭ってワケか。」

「そうよ、だからアタシは父に育てられたわ。父は小学校の先生をしている。次に兄弟だけど、アタシには兄がいるわ。滅多に帰って来ないけどね。最後の質問、好きな人がいるかどうかだけど・・・既にこの近くにいるわ。この人よ。」

そう言うのと、桜菜は雄也を指差した。

「やっぱ笠美だったか。」

「ええ、一目惚れってヤツよ。」

そんな会話をしていると、軽井沢が教室に戻って来た。
ガラッ！

「明日岡、浜谷、青木、畑中、笠美、朝霧！呼び出しだ！」

「呼び出して、誰からです？」

「中嶋茂次って人だ。オマエら、何かやらかしたのか？」
軽井沢の言葉に、スウ達は一瞬沈黙した。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「そんなワケないでしょうが・・・」

スウはそう言うと、ため息をついた。

職員室で、スウ達6人は中嶋と会っていた。
なぜか桜菜もいる。

「警部、頼むから連絡はメールでしてくれって言っただろ？何のためにアドレス教えたんだよ。」

スウは文句を言っている。

「スマンみんな。携帯の電池が切れてたもんでな。」

中嶋は平謝りする。

「まあ別に良いけどさ・・・で、こんな時間に来るって事は、また事件か？」

「話が早いな。そうなんだ。今から来てくれるか？」

「ああ、良いよ。みんなどうせヒマだし。な？」

篤子達も頷く。

「それは良かった。ところで・・・一緒にいるこの子誰だ？」

中嶋は桜菜の方を向いて言う。

「さっきからずっとおったやないかい！！」

雅子が叫んだ。

「今日この学校に転校して来た、成瀬桜菜です。」

「成瀬君か。オレは中嶋茂次、階級は警部だ。よろしくな。」

「よろしく。」

「じゃあ、そろそろ行くか。」

スウ達7人は、中嶋について行った。

FILE 33：茶道家元毒殺事件『1』

スウ達は、病院のある部屋に案内された。

『急患専用治療室』

「毒殺!？」

「ちよつと待つて、この人さつき死んだばかりなんでしょ？」

「そやのに何で毒殺やとわかるんや？」

スウ達は口々に言う。

「被害者が食べていたケーキから毒物が検出されたんだよ。何だと思う? トリカブトだよ。」

「キンポウゲ科の植物で、非常に強い毒性を持つアレですね？」

「ああ、毒素を抜けば漢方薬としても使える代物だ。」

葉平の質問にスウが答える。

「側にいた女性がケーキを怪しいと感じて、警察に通報したそうだからすぐわかったんだよ。被害者は桐沢香代子^{ガイシャ}、65歳。茶道、桐沢流の家元だ。」

「家元？」

「お茶の先生の事ですよ。」

「で、問題のケーキなんだが・・・ケーキはお茶づけとして食べていたようだ。だが、お茶の方からは毒物は検出されなかったんだ。」

「おかしいよ。」

「何がだ、朝霧君？」

「お茶の先生なら普通、和菓子だよ。ケーキは合わないよ。」

「言われてみればそうだな。」

スウ達が会話をしていると、ドアの向こうから人の声が聞こえて来た。

「何があつたつていうんです? 何で警察が来てるんですか!？」

「ですから、もうすぐ説明がありますから!!」

『ナナモリヒロコキ
七森宏之 家元の一弟子』

「家元は・・・桐沢はどうなったんですか!？」

△ラヤマタクロウ
『村山卓郎 同じく家元の一弟子』

「お願いです、教えてください。」

ギイ・・・

「お気の毒ですが、桐沢さんは先程お亡くなりになりました。」

「何て事だ!こんな日に・・・!!」

「おい、頼むよ。一目家元に会わせてくれ!」

「すみませんが、それはできません。遺体はこれから司法解剖にまわされます。」

「解剖!？」

「何でそんな事を!？」

「被害者が食べていたケーキからトリカブトの毒が検出されてます。つまりこれは意図的な殺人の可能性があるので。」

「バカな!こんなガキに何がわかるっていうんだ!？」

「そうですね、第一何でこんな所に高校生が7人も？」

スウと篤子は警察手帳を取り出した。

バツ!

「オレは警視庁捜査秘密課、明日岡スウ警視正だ!!」

「!？」

「アタシは同じく警視の浜谷篤子!!そしてこの5人はアタシ達の仲間です。」

「協力していただけますね?」

FILE 34：茶道家元毒殺事件『2』

スウ達は、ある部屋に集まった。

1人の女性が涙を流している。

「彼女は住み込みで、被害者の身の回りの世話をしていたお弟子さんです。ケーキの異常に気づいて、110番通報をしてくださった方です。その2人も被害者のお弟子さんです。以上、この3人が被害者が倒れた時側にいた人物です。」

「それじゃあ、2・3質問させてください。今日は何の日なんですか？さつき村山さんが言っていましたよ、『こんな日に』って。今日はあなた達にとって何か特別な日なんでしょう？」

さつきの女性が口を開いた。

『神菜遊乃^{カミナユノ} 家元の弟子』

「実は今日、桐沢流の後継者を決めるハズだったんです。今日私達の家元の所に集まったのは、次期後継者の発表を聞くためだったんです。家元は今年で65歳になりましたが、お子さんがいません。」

そこで、一番弟子の内の誰かを後継者にするおつもりだったんです。

「

「で、その後継者は？」

「家元は普段から、実力では村山さんが一番だとおっしゃっていました。」

「だからって、村山が選ばれるとは限らないじゃないか！」

「イヤ、家元はこの私を桐沢流5代目の後継者にするおつもりだったんです！」

「バカな！オマエが後継者だと！？」

「3日前、家元がわざわざ私の家を訪ねて来てくださったんです。その時私を後継者にするとおっしゃって、立派な花の鉢植えまで頂きました。」

「鉢植え？」

「ええ、家元は生け花の腕も中々のものだったんです。花の事にもそれはそれは詳しい方で。」

「ああ、そういえば季節外れの花だから、手に入れるのに苦労されたようでした。『これで私の気持ち伝わるでしょう』とおっしゃってました。」

「季節外れの花をわざわざ用意するって事は、よっぽど後継者として村山さんに期待してたようだな。」

「でも、残念です。できれば、家元の口から発表していただきたかった。」

その時、江菜弓香が部屋に入ってきた。

ガチャ！

「失礼します。司法解剖の結果が出ました。」

スウは紙を見た。

「どうだった!?」

スウは黙って紙を渡す。

「死因はやはりトリカブトによる中毒死だな。ケーキに混入されていた毒とも完全に一致してる。思った通りじゃないか。」

中嶋はそう言うが、スウは納得いかないという表情をしている。そして、遊乃の方を向いた。

FILE 35：茶道家元毒殺事件『3』

スウは遊乃の方を向くと、質問を始めた。

「神菜さん、最初にケーキが怪しいと思ったのはあなたですよ？」

「え？ええ。」

「なぜわかったんです？被害者はその時、お茶も一緒に飲んでいたハズですよ？なぜ、ケーキだけが怪しいと思ったんですか？」

「あの時、アリが落ちていたケーキにたかってたんです。そして、その中の何匹かが死んでいたのでそれで・・・ほ、本当ですよ！それにあのケーキだってもらい物で、家元がご自分で箱から出したんですよ？でも箱には送り状もついていませんでしたし、一体誰からの贈り物だったのか・・・」

「警部、ケーキの送り主についての調べは？」

「ああ、現在調査中なんだが・・・」

中嶋は紙袋から複数の箱を出した。

中身はどれも例のケーキだ。

「見てくれ、このケーキ自体そこいらの店でよく売ってる物なんだ。この通り、殺しに使われたのと同じ物が簡単に手に入ったよ。メーカーにも問い合わせてみたんだがね、製造段階で毒が混入する事なんてありえないって怒られたよ。わかってるのは、この前定例のお茶会が開かれて、その時大勢の客が贈り物をして行ったようなんだが、どうもその中の1人が置いて行ったようなんだ。」

「でも、ケーキは目立つよ。」

「そうなんです、皆さんほとんど和菓子を持って来てらっしゃいましたからね。でも家元は、和菓子よりケーキの方が好きだったんです。」

「周りには内緒にしてありましたけどね。お茶の先生なのにケーキが好きなんて恥ずかしいからって・・・」

「その事を知ってる人は？」

「まあ、我々3人くらいかな？ちよ、ちよつと待ってください。この3人の中に毒入りのケーキを贈った人物がいるって言ってますか！？」

「残念ながら、そう考えれば辻褄^{ツジツマ}が合うんだよ。」

「私と神菜さんはちがいます。一歩間違えれば、死んでたのは私達のどちらかなんですよ！？」

「？」

「私と彼女も一緒にあのケーキを食べたんです！家元に言われてその場で箱を開け、ナイフを入れたんですよ！？」

「ちよ、ちよつと待ってくれ！つて事は・・・1つのケーキを3つに分けて食べ、1人は死に2人は無事だった・・・どういう事だ！？そんな都合のいい事があるのか！？」

「でも、注射器を使えば・・・」

「何を言ってるんだ、家元の見てる前でそんな事できるか？」

「イヤ、待てよ・・・？もし仮に、犯人の狙いが家元じゃなかったとしたら・・・？」

FILE 36：茶道家元毒殺事件『4』

「もし仮に？犯人の狙いが家元じゃなかったとしたら？犯人は村山さんか神菜さんを狙っていたとも考えられる！！候補者である村山さんと神菜さんが死ねば、当然別の人間が選ばれる！！」

「家元と村山さん、神菜さんの誰が死んでも得をする人物は七森さんだが、裏をかいて神菜さんという可能性もある・・・」

「私じゃありません！私は村山さんに恨みなんか・・・」

「まだ犯人の狙いが村山さんだとは決まってませんよ？」

「ボ口を出したな！？オマエは注射器を使って毒を注入して、家元と村山を殺すつもりだったんだ！！」

「私じゃありません、信じてください！！」

「わからんぞ。オマエだつて弟子の1人だ、後継者を狙つてたんじやないのか！？」

「あなただつて候補の1人でしょ！？動機は充分じゃない！！オマケにケーキを食べていないのはあなただけよ！！」

「バカ言え、オレは別に村山やオマエなんか・・・」

「2人の内どちらかが毒を！？」

「まあまあ、まだ何も決まったワケじゃないんですから。問題は犯人がどうやって毒を盛ったのか・・・そして、狙いは本当に家元だったのか・・・？」

その時、哀が突然苦しみ出した。

「う！ぐっ・・・が！？ぐ、ぐ・・・苦しい。」

「朝霧君！毒入りケーキを食べたのか！？すぐ医者を呼ばんと・・・」

「警部、警部。朝霧君が食べたのは、さっき警部が買って来たヤツです。毒入りはビニールの中ですよ・・・」

「あ？」

「の、のどにつかえた・・・」

「バカヤロウ!!」

「もう!丸かじりなんかして。ちゃんとナイフで切り分けなさいよ。」

そう言っていると篤子はケーキを分けようとナイフを持った。

「!」

スウは何か感じたのか、ビニールの中のケーキを見に行った。

「どうしたんだ?明日岡君。」

「イヤ・・・」

「行き詰まっちゃいましたね・・・」

「そうだ、家元はお花にとっても詳しい人だったんですね!」

「え?ええ。」

「家元が村山さんに贈った花って、何だったんですか!」

「え?」

「イヤ、季節外れの花って何なのかなって思ってた・・・」

「ええと、あれは確か・・・何だっけな?」

「ああ、あれなら・・・金盞花キンセンカですよ。」

篤子は聞き終わると、スウに耳打ちした。

ヒソヒソ・・・

「どうしたんだ、一体!」

「これで事件は解決したよ、警部!!」

FILE 37：茶道家元毒殺事件『5』

「これで事件は解決したよ、警部。犯人の狙いはやはり家元だったんだ。そして・・・」

「ケーキには毒なんか入ってなかった!!」

「!？」

スウ達は外に出ると、ケーキの箱を2箱台車に乗せて持って来た。

「一体どういう事だ!? 毒はケーキに入ってたってのは!？」

「まあ慌てないください。今から事件現場の再現を試してみましよう!!」

「一体何を始めようっていうんだ？」

「家元は毒入りのケーキを食べたせいで死んだんじゃないの!？」

「そうです、これは毒入りケーキによる殺人事件です。」

「何なんだ!? 今、毒はケーキに入ってたって言ったばかりじゃないか!! 君の言ってる事はさっきから矛盾だらけだぞ!？」

「オレは間違った事は言ってます。今からそれを実証しようっていうんです。ご協力を! これは事件で使用されたのと全く同じケーキです。間違いありませんね？」

「は、はい。」

「これを3つに切ります。」

スウはケーキを3つに切り分けた。

「はい、3つに分けました。事件の時と同じです。そして3つに分けられたケーキを食べ、家元は死に村山さんと神菜さんは無事だった・・・警部、朝霧、青木。ケーキを食べて。」

「た、食べるのか？」

「大丈夫、トリカブトなんて入れてないから。」

「おいしいよ。」

「ウチも同じく。」

哀と雅子は普通にケーキを食べた。

中嶋も恐る恐るケーキを口に入れる。

パク！

ガシヤア！！

「ゲホッ、ゲホッ。ど、毒が・・・毒が入ってた！？」

「！？」

「安心して、ワサビだよ。」

「何て事するんだ！？寿命が縮まったよ！！」

「犯人と同じ手を使ったまだよ、中嶋警部。」

「おい、オマエらには入ってたか！？」

「入ってないよ。」

「ウチも同じく。」

「？」

「こういう事です。まずナイフのどちらかの刃に毒を塗り、毒を塗った方の刃が必ず真ん中のケーキに触れるように切る。そう、このように・・・」

ニユリ！

スウはナイフの刃にワサビを塗ると、全員の前でやって見せた。
ザク！

ケ

包丁

ケ 『毒』

ケ

ケ

『毒』 ケ

包丁

ケ

「こうすれば、1つにだけ毒を盛る事が可能です。そうですね？
村山卓郎さん・・・！！」
スウは村山を指差した・・・

FILE 38：茶道家元毒殺事件『6』

「ちょ、ちよつと待ってくれ。何で私が？私は家元の後継者なんだぞ！？」

「それを証明してくれる人がいますか？」

「！」

「思った通りだ。それはやはりあなたが1人で言ってるだけなんですよ？」

「だ、だからって私が殺した事になるのか！？第一家元は私のために花の鉢植えまでくださったんだぞ！？」

「それです！その花が問題だったんです。金盞花。家元があなたに贈った花です。この花が証言してくれます！」

「いい加減にしろ！！花がしゃべるとでもいうのか！？」

「そう！花はしゃべるんです！！それを聞き取れなかったのが致命的でしたね。花はこう言っています。あなたと家元はうまくいってなかった。あなたは後継者にはなれない！・・・と。」

「ど、どういう事だ・・・！？」

篤子は1冊の本を出した。

「花・・・言葉？」

「答えはそこにあります。」

パララ・・・

『金盞花

花言葉

失望

別れの悲しみ』

パスッ！

「家元さんはお花にとっても詳しい方だったそうですね？そういう人は贈る花に意味を込めるんですよ。あなたを後継者にするつもりなら、なぜこんな花言葉の花を贈ったんでしょう・・・？今の季節こ

の花を手に入れるのは非常に困難です。それなのになぜあえてこの花を選んだのか・・・他に説明のしようがありますか？」

「君の言う通りだ。あの日、家元は私に桐沢流を出るように言いに来たんだ。同じ茶道でも家元と私のやり方はどんどんちがつてきていた・・・でも、だからって破門にするなんてヒドいじゃないか！私だってあんな事しなくなかった。師匠を殺すなんて事、しなくなかったんだ！！桐沢流の家元になるのは、私の・・・私の夢だったんだ！！」

「あーあ、今回は篤子が花言葉を覚えてなかったらどうなってたかな。」

「でしょ？」

「花言葉か・・・全く人生いくつになっても勉強する事はあるわな。」

「げ！？警部が花言葉！？」

「似合わないーいー！！」

「警部、警部。ピッタリの花があるよ。」

「おー！！何だ！？」

『ボケ

花言葉

単純』

「朝霧ー！！」

「アハハハハ。」

哀を追って行く中嶋と、それを呆れた目で見つめるスウ達。

そんな彼らを、1人の男が監視していた・・・

果たして、この男の正体は・・・！？

FILE 39：謎の組織『海王星』

某国 某所

1人の女性が、大きな建物の前に立っていた。

彼女は扉を静かに開け、中に入る。

ギギイイイ……

中には、1人の老人が立っていた。

「ただ今戻りました、キング・ポセイドン。」

女性はキング・ポセイドンという老人に声をかける。

「ご苦労だった、クラーケン。して、調査の方はどうなった？」

「順調です。あの『明日岡スウ』と『浜谷篤子』が柏大学付属高校に通っている事を突き止めましたわ。」

クラーケンと呼ばれた女性は、不敵な笑みを浮かべながら言う。

「ククク、そうか。あの小僧と小娘め、やはりまだ仲間の仇を討つ気にいるのだろうな。我らに挑もうという事か。」

「無謀にも程がありますわね。私達『海王星』に逆らおうとは……キング・ポセイドン、いかがいたしますか？」

クラーケンがキング・ポセイドンに尋ねた。

「ククク、今はまだ泳がせておけ。いずれ時がきしだい、返り討ちにしてくれるわ……」

「その意気ですわ、キング・ポセイドン。ところで、もう1つの調査についてですが……」

「おお、調べ終わったのか。で、どうであった？」

「キング・ポセイドンの考察した通りでしたわ。『例の怪盗』は今、2代目に当たる人物が役割を引き継いでいるようです。」

「ククク、やはりそうであったか。で、通っている学校は突き止めたのか？」

「ええ。どうやらあの2人と同じ学校に通っているようですわ。」

「そうか。あの怪盗もいずれ、機会をみて始末をせねばな……ク

ラーケン、引き続き調査を続行せよ。」

「わかりましたわ、キング・ポセイドン。それでは失礼いたします。」

ラーケンは、足早に歩いて行つた。

明日岡スウと浜谷篤子の宿敵、『海王星』。

果たして彼らは何者なのだろうか・・・！？
全てはまだ、謎に包まれている・・・

FILE 40：消えたダイヤの謎『1』

おっす、みんな。

スウだ。

今日はまた、オレや篤子が小学6年生だった頃に解決した事件の話をしてやろう。

「よし、終わりー!!」

「遊びに行こうや、スウ!」

「ちよつと。スウ、今日日直でしょ!!」

「なあ、篤子。この前アイス奢ってやったよな?」

「え?う、うん・・・」

「だったら、今こそその借りを返す時じゃないのか?そういうワケで、後よろしく。」

「ちよつと!それとこれとは別でしょ!?」

「勘弁してくれ!今日はゲームの発売日なんだよ!!」

「ダメ!!」

その時、担任の先生が走って来た。

「明日岡!浜谷!保安!!」

「先生・・・どうしたの?」

「どうしたのって、オマエら・・・今、職員室に警察の方が来てるぞ!!」

「ケーサツ?」

「オマエら、一体何をやらかした!?」

「あ、あの・・・先生・・・それってもしかして、図体のデカい目つきの鋭い人?」

「ああ、そうだ!自分の教え子が警察のお世話になるなんて・・・」

「・・・」

ブオオオオ・・・

「全く迷惑な話だよなー。連絡はポケベルにしてくれって言ってるのに。」

「そやけど、日直はサボれたやん。」

「そ、そんな。だって、緊急の用事だったんですよ!!」

「で？殺人課の刑事が出て来るって事は、また殺人事件なワケ？」

「イヤ、今回はちよつとちがう。まあ、とにかく本人に会ってみてくれ。あ、見えて来たぞ。」

ピタッ！

バン！

「大きな家だな・・・」

『中嶋一葉：中嶋茂次の姉 中嶋総合病院院長』

「やあ！久しぶりね、明日岡君！」

「一葉さん！何で一葉さんがここにいるの！？ここ、一葉さんの家！？」

「ハハ、まさか。私はこの家の主治医をしているのよ。それより・・・

・し、茂次！どうしてあなたがここにいるの!？」

「え？何でって、オレも一応刑事だし。」

「私が呼んだのはあなたじゃない！明日岡君よ!!」

「何だよ、警視正に連絡とってやったんだぞ!!」

「一葉さん、それより用件は何なの？」

「あ、そうだった。あなた達・・・天王州ダイヤモンドって知ってるかしら？」

FILE 41：消えたダイヤの謎『2』

「天王州・・・ダイヤモンド?」

「天王州ダイヤモンドっていえば、日本中にチェーン店を持つてる大型宝石店よ。今はもう日本の宝石業界をほぼ独占しちゃってるの。」

篤子が天王州ダイヤモンドについて説明する。

「そう、ここは天王州ダイヤの会長の屋敷よ。」

「で?その天王州ダイヤがどうかしたワケ?」

「知ってるかしら?『聖女の瞳』という宝石を・・・天王州ダイヤが所有する、30カラットものダイヤモンドよ。世界と秘宝とまで言われていてね、少なく見積もっても時価・・・7億円!!」

「な、7億円!?!」

スウ達は驚いた。

「まさか、一葉さん・・・それが盗まれたとか言っんじゃないだろうね・・・」

「イ、イヤ、それが・・・わからないのよ。」

「わからない?」

「無くなった事にはちがいないんだけど・・・それが・・・消えてしまったの・・・目の前から、パツとね・・・」

スウ達は天王州家応接室で、一葉が再生した防犯カメラのビデオテープを観ていた。

ザーツ・・・

ピッ!

『天王州雪麿 天王州ダイヤ社長』

「いよいよ4日後だな、聖女の瞳の一般公開！」

『川窪永介 社長秘書』

「ええ、世界の秘宝と言われるくらいの代物ですからね。新聞やT

Vでも大評判ですよ。」

『天王州雪吉郎 テンノウスセキチロウ 天王州ダイヤ会長』

「フフ、そうでなくては困る。何せ我が社の華々しい世界進出の第1歩だからな。」

『天王州雪希 テンノウスユキ 社長の1人娘』

「それはそうとおじい様。今でも身につけてらっしゃるんでしょう？」

「な、何をです！？」

「鈍いわねえ、聖女の瞳よ。」

「え、でも聖女の瞳は、いつも金庫の中に厳重に管理してるんじゃない？」

「それはニセ物ですよ、中嶋さん。」

「2つあるんだよ、聖女の瞳は。1つはガラス玉。そして今、私の内ポケットにあるのが本物だ。つまりガラス玉を金庫にしまっているのさ、カモフラージュとしてな。そして本物はいつも私が持ち歩いているというワケさ。」

「そのニセ物がよくできてるんだ。2つ並べられたら、簡単に見分けはできないな。」

「だがニセ物は所詮ガラス玉だ。落とせば割れるし、キズもつく。」

「でもズルいわ、おじい様だけ独り占めして。」

「ハハ、よろしいじゃありませんか。」

「そうそう、今日は特別に見せてやるんだからな。よし川窪、部屋のカギを調べてくれ。」

永介はドアや窓を調べた。

「OK、ドアも窓も閉まっています。」

「ウム。」

「おじい様、早くして！」

「フフ、では始めるか。諸君！これが天王州ダイヤの宝、聖女の瞳だ！」

キラキラキラキラ・・・

FILE 42：消えたダイヤの謎『3』

「諸君！これが天王州ダイヤの宝、聖女の瞳だ！！」

キラキラキラキラ・・・

「本当・・・本当にキレイ！！」

「イ、イヤア、流石30カラット。結構重い物なんですねぇ！」

「ハハハ。手が震えてますよ、中嶋先生。」

そう言った永介も、ダイヤを落とした。

ポロツ！

「おっと！！イヤア、すみません。中嶋先生の震えが移ってしまっ
たようです。」

「フーン、普段宝石を見飽きてる川窪でも震える事なんてあるのね。」

「

「フフ、聖女の瞳は特別だからな。仕方あるまい。お、川窪。すま
んが水割りをもう1杯作ってくれ！」

「はい。」

スッ！

ガチン！

カラカラ・・・

「ハハハ、まだ震えが残ってるのか。それはダイヤじゃないぞ。」

「ど、どうもすみません。」

「どうだ、気がすんだ雪希。」

「いいえ、まだよおじい様。虹色に光るんでしょう？聖女の瞳って。」

「どういう事です？」

「聖女の瞳は、ロウソクの火で見ると虹色に光るんだよ。」

「あの、ご覧になるんですか？」

「仕方あるまい。コイツは言い出したら聞かんからな。」

「わかりました。じゃあ、私がロウソクを取って来ましょう。」

「ドキドキするわね。」

「イヤア、こんな貴重な物を見せていただけなんじゃないって思いませんでしたよ。」

ボタン！

「さあ、いよいよ始めますよ。」

永介が電気を消す。

「さ、おじい様。」

雪吉郎はダイヤをロウソクに近づけるが・・・

「？」

「何よ、光らないじゃない！」

「イヤ、きつと火が弱いんだよ。」

「もつと火に近づければ・・・」

サツ！

永介はロウソクに手を伸ばすが、手元が狂った。

ガンッ！

「あつ！」

辺りが真っ暗になる。

「だ、誰か電気を・・・！！」

スッ！

「誰だ、何をする！？」

「どうしたんです！？」

「明かりだ、明かりを点けろ！！」

ガシヤアアッ！！

「！！！」

「な、何、今の音！？」

ガチッ！

「な、何だ、ガラスが割れた音か・・・」

「どうしました、会長？」

「どこだ！？聖女の瞳はどこへ行っただろう！？」

プッン！

「・・・というワケだ・・・」

スウは頭をかく。

「身体検査はしましたか？」

「勿論だとも！それに部屋中探し回ったし・・・盗まれてからこの部屋を出た者は1人もいないんだ。それなのに・・・消えてしまった・・・」

「そうなんです、ついさっきまでここにあつたのに・・・消えてしまったんです。煙のように！！」

「ダイヤを消す方法は1つだけです。知ってますよね？燃えるんですよ、ダイヤって。ダイヤは炭素の塊ですから、高熱にさらせば燃えて無くなっちゃいます。でも、ロウソクやライター程度の熱じゃビクともしませんよ。」

スウが簞子の片に手を置く。

ポンッ！

「そういう事！従って・・・消えてなんかいないって事です！！」

FILE 43：消えたダイヤの謎『4』

「スウ君。聖女の瞳は世界の秘宝と言われる貴重な物だ！この事が公表されれば、我が社の信用はもちろん、国際問題にまで発展かねない。そういう理由で、我々は正式に警察に捜査を依頼するわけにはイカンのだ！つまり・・・我々は全ての願いを君に託す他ない！頼む、我が社を、イヤ世界の秘宝を救ってくれ！！」
コク・・・

「どう、何か糸口はありそう？」

トン！

「犯人は恐らく1人です。」

「ど、どうしてわかるんだね？」

「よく考えてください。聖女の瞳が盗まれた時、この部屋は密室・・・しかも真つ暗だったんですよ？仮に犯人に共犯者がいたとしても、外で待つてる共犯者にダイヤを渡したとすれば、その時外から光が入ってしまいます。しかしビデオにはそんなものは映ってなかった！」

「ちよつと待つて、それじゃ・・・やっぱり犯人はこの中にいるつて事じゃない！？」

「バカな。ここには監視カメラがついてるんだぞ？この部屋では重要な会議や商談が開かれるため、監視カメラが取り付けてある。その事はここにいる全員が知ってるんだ！」

「そうですよ。カメラの前で盗むなんて、そんなバカな事できますか？やっぱり消えてしまったんだ。そうとしか考えられない・・・」
「いいえ、物は消えたりしません。盗まれたんです。宝石ドロボウをする時一番苦勞する事、それは・・・盗んだ宝石の処理です。売るにしろ形を変えるにしろ、専門的知識やルートがなければどうしようもない。しかし、天王州ダイヤの関係者ともなればそのぐらいの知識やルートはいくらでもあるハズ。つまりあなた達なら、犯行

を成功させる可能性が非常に高いという事になります!!」

「でもだとしたら、ダイヤはどこへ行っただ!?盗まれてからこの部屋を出た者は誰1人・・・一葉君!君、確かさつき部屋を出たな。スウ達を迎えるために玄関まで!!」

「そ、そんな!部屋を出る前全員の身体検査をしたじゃないですか!でも見つからなかった!!」

「しかしダイヤが盗まれたのは部屋が暗くなった時だ。それ以降部屋を出たのは、君1人なんだぞ!？」

「待ってください、私じゃない!私は絶対ちがう!!」

「おじいさん、待ってください!まだ決め手になるようなものは何もありませんよ。」

FILE 43：消えたダイヤの謎『4』（後書き）

予告のページ

『名探偵・スウと篤子の事件簿』と、ある作品とのコラボ小説の執筆が決定！

『ある作品』の詳細については今後明らかになるよ！
続報を待て！！

FILE 44：消えたダイヤの謎『5』

中嶋茂次はあれから、家の中をくまなく探していた。

「ダメだ・・・やはり見つからん。」

「まさか・・・本当に消えたというのか？あの世界の秘宝が・・・！？」

スウはさつきから、防犯カメラの映像を繰り返し観ている。
ピッ、ピッ！

「どうしたの、スウ？」

「引つかかるんだよ、どうも・・・」

「！？引つかかるって、何が！？」

「それがわからねえんだよ。」

「おかしい、どう考えても変だわ！！」

「イヤ待てよ？犯人はダイヤを飲み込んだんじゃないのか！？」

「中嶋警部、30カラットってかなりあるのよ？飲み込めるワケないでしょ。」

「アホやなあ、中嶋警部は。」

「ちよつと、茂次！アタシに恥をかかせないでよ！！」

「川窪！水割りもう1杯作ってくれ！！」

カラン・・・

「お、スマンな。」

「・・・！」

ダン！

「ど、どうしたって言うんだ？いきなり。」

「わかったんです、犯人のトリックが・・・そして恐らく、ダイヤはもうこの部屋にはありません・・・」

「な、何だ！？」

「どういう事だ！？一体誰なんだ、犯人は！？」

「その前に皆さん・・・ボクが手品を見せてあげましょう。これは

トリックの説明です。」

スウはテーブルにあるピーナッツの皿をチラリと見る。
他の人達もつられて見た。

「そののピーナッツ・・・1つボクにくれませんか？」

一葉が近づき、ピーナッツを1つ取ってスウに渡す。

「ども！ところで・・・雪吉郎さん、ゴルフとか好きですか？」

「あ、ああ。好きだが？」

「それじゃ、ボクがこのピーナッツをボールに変えてプレゼントしましょう。」

クルッ！

フッ！

「うーん・・・はい！」

スウが一連の動作をした後、彼の右手からボールが出て来た。
パッ！

「ど、どうやったの！？」

「簡単な事です。ボクが皿をチラリと見た時、みんなもつられて見ましたよね？その隙にここのボールを手に取り、息を吹きかけるフリをしてピーナッツを袖の中に落とす・・・そしてコッソリ右手に持ちかえれば、ボールに早変わりというワケです！」

「意味はわかるが、これが犯人とどうつながるんだ？」

「そっか！そういう事ね？」

「篤子も気づいたか。皆さんにお聞きしますが、もしボクが今の方法でこの2つのピーナッツをスリ替えたとしたら・・・ピーナッツがスリ替わった事に一体誰が気づくと思います？1人もいないでしょう、恐らく。つまり・・・犯人は『聖女の瞳』をスリ替えたんです！これと同じ手を使ってね！！」

FILE 45：消えたダイヤの謎『6』

「『聖女の瞳』のレプリカは本物ソックリだったんですね？それならスリ替えてもそう簡単にはバレません。」

「じゃあ、部屋が暗くなつたあの時に？」

「いいえ、この事件の犯人はもつと大胆な方法をとりました。そう、部屋がまだ明るい時、みんなの見ている前でスリ替えたんです！犯人はダイヤを袖の中に隠してたんです、ボクがピーナッツを隠したように。しかしダイヤも30カラットもあれば結構な重さだ。そんな重い物が袖の中にあれば、当然動きは鈍くなる。犯人はすぐにも、ダイヤを袖から出したかった。でもできなかったんです、犯人はこの部屋にカメラがある事を知ってましたからね。」

「しかしそれはカメラの死角に入れば済む問題なのではないかね？」
「その通りです。でもできなかったんです、犯人には！なぜならその人物は、カメラの前で水割りを作らねばならなかったから。そして、その犯人は・・・川窪栄介さん、あなたです！！」

「な、何を言ってるんだ君は・・・証拠もなしにそんな事言つたて・・・」

「証拠ですか？証拠は・・・」

スウは栄介に向かって何かを投げる。

ブン！

パシ！

「それです。」

パツ！

「ピーナッツ？」

「違いますよ、証拠はピーナッツをキャッチしたこの手！今あなたはキャッチする際に右手を使った。つまりあなたは右利きです。ところが・・・篤子！」

篤子はビデオのスイッチを入れた。

ピッ！

「これは聖女の瞳に触る前の場面です。やはりあなたは右利きですね？ところが聖女の瞳に触った後は急に左利きになってます。でもそれは当然の事。なぜならその時、あなたは右袖にダイヤを隠してたからです。」

「ボクがビデオを見て感じた鈍さはこれだった。もしあなたが犯人でないなら、納得がいく説明してもらえますか？」

栄介はヒザをついた。

FILE 46：消えたダイヤの謎『7』

「川窪、オマエが・・・」

「ダイヤをすり替えたのは部屋が暗くなる前です。そして暗くなる前に部屋の外に出たのは、ロウソクを取りに出た川窪さんだけ！その時部屋の外に持ち出したんでしょう。」

「でもなぜ？なぜわざわざ部屋を暗くしたの？」

「部屋を暗くしたんは、雪希さんがロウソクの火で虹色に光る聖女の瞳を見たい言つたから。ガラス玉が虹色になんか光らんから、川窪さんは困って二セ物を本物と思いこませたまま消してまおうとしたんや。」

「天王州ダイヤの信用に関わる一大事ですからね。川窪さんは当然、すぐには公表されない事を知ってたんです。」

「その間にダイヤを売りさばき、外国に逃亡する！！」

「それじゃあ、すり替えた二セ物・・・あのガラス玉はどこに行つたんだ？」

「私達部屋中探したけど見つからなかったわよ？」

「木は森の中に隠せ・・・この割れたガラスの中に二セ物のダイヤの破片が混じってるハズです。今にして思えば川窪さん、あなたはワザとガラスと割ったんですね。そして雪吉郎さんの手から二セのダイヤを奪い取り、ガラスと一緒に踏み碎いた。そうやって二セ物を本物と思いこませたまま消してしまおうとしたんでしょうが・・・物は消えたりしないんですよ、絶対にね！！」

「フフ、何もかもお見通しってワケか・・・本物の『聖女の瞳』・・・ロウソクを取りに出た時、台所に隠しておきましたよ。」

その後、スウ達は見つかったダイヤに魅入っていた。

FILE 47：可憐なメイド刑事・スウ！？『1』

スウと篤子は、捜査秘密課の一室に呼び出されていた。2人が一室の前に来ると、1人の女性が立っている。

「あれ？あなた・・・羅刹刑事部長？」

ラセツ ヒヨウカ
羅刹氷歌『警視庁捜査秘密課・刑事部長』

「久しぶり、スウ君！」

説明しよう。

彼女はオレと篤子の元上司で、刑事部長の羅刹氷歌さんだ。雪女と人間の間に生まれたハーフらしい。

確か今は、北海道警に勤めてるハズだが・・・

「でもどうしてここに？確か北海道警に移ってたんじゃ・・・」

「向こうの子達と折り合い悪くてさー。面倒くさいから戻って来ちゃった。」

「面倒くさいって・・・」

「それに、スウ君と篤子ちゃんにも会いたかったしね。どう？少しは進展したの？」

「キス程度はしました。ちなみに2人共階級は警視正と警視のままです。」

「まあ6年生の時点での階級だったしね。4～5年くらいじゃまだ上がらないのも無理ないわ。」

スウ・篤子・氷歌の3人は、署長から指示を受けていた。

「というワケでだ、オマエ達3人には連続通り魔事件の捜査のため潜入捜査をもらうっ！」

「潜入捜査ですか？」

「ああ、犯人と思われる者がよく通っている店があるらしくてな。」

場所は・・・喫茶店だ!!」

「喫茶店・・・？」

で、その潜入先はつつと・・・

メイド喫茶『ハニ HONEY』

「お帰りなさいませ、ご主人様！・・・て、何ですかこれは!？」

「似合ってるわよ、スウちゃん！」

そう、潜入先はメイド喫茶だった。

つまり、今オレはメイドの格好をしている。

つけ毛やら胸パッドやら・・・

「何で潜入捜査でこんな格好をさせられなきゃなんないんですか！？」

「店員なら犯人に近づいても怪しまれないでしょ？」

「なら羅刹刑事部長もこの格好したらどうなんですか？」

「私はそんな事なくても犯人に近づけるから。」

「諦めなさい、スウ。羅刹刑事部長はもう上司。上司の命令は絶対よ。」

「篤子まで・・・」

「うん！篤子ちゃんも似合ってるわよ。」

「オマエ接客とか苦手じゃなかったか？」

「スウの辱めはアタシの辱めも同様。アタシも頑張るわよ。」

オレ達は今、潜入捜査でこのメイド喫茶に来てる。

「お待たせしましたご主人様。」

「君新人？名前は？」

「・・・スウです。」

「スウちゃんかー。設定はツンデレ？クーデレ？それとも妹？」

誓って言うが、決して趣味じゃない！（女でもねえ！）

「頑張つてねー。」

「スウ！犯人捜しも忘れないでね。」

「・・・ああ。（・・・犯人も何でこんな所通つてんだか・・・おかげで、こんな目に・・・だがこれも、市民の安全を守るため！辛くとも頑張る！！）」

次回も前途多難です！？

FILE 48：可憐なメイド刑事・スウ！？『2』

「（これも市民の安全と平和を守るため・・・辛くとも頑張る！！）」

「

「・・・あれ？明日岡君ちゃう？」

「！？」

スウが振り向くと、そこには笠美達が立っていた。

「・・・待て、オマエら・・・何か勘違いしてるぞ？」

「明日岡君にこんな趣味があったとは・・・」

「ここントコ事件多かったもんな・・・」

「安心しい、クラスメートには黙っとくさかい。」

「だから、違うと言っとろうが・・・」

「潜入捜査？」

「そう！容疑者が通ってる店らしくてな、ここ。だからこうして張り込んでんだよ。篤子も一緒にな。」

「大変なんですね、高校生刑事は。」

「でもわざわざ店員になる必要があるの？」

「色々あるんだよ、事情つつもんが。ってかなぜオマエらこんな所に来たんだ？」

「好奇心や好奇心！話題作りにもなるしな！」

「せっかくだから何か頼みましょうか。」

「じゃあ、みんなでこの『巨大ラブリーケーキ』っての頼もか！」

「わかった、注文入れて来るわ。」

スウはキッチンに入った。

「巨大ラブリーケーキ1つ入りました！」

「はいはい。」

キッチンのシェフは手際良くケーキを作っていく。
程なくして、ケーキは完成した。

スウはケーキを持って行く。

「巨大ラブリーケーキお待たせしました。じゃ、オレはこれで・・・」

「待ちいや。ケーキに何か文字描いてえや。」

「は？」

意味がわかっていないスウ。

「ここに書いてあんで？」好きなメイドに文字を描いてもらえま
す」ってな。」

「ハア！？」

「さ、早よ描いてえや。」

「・・・かしこまりました。」

スウは赤いクリームでハートマークを作り、真ん中に『スウ』と描
いた。

「おおきにな！」

「（テメエら・・・後で覚えてろよ・・・）」

スウは顔を紅くしながら、キッチンに戻って行く。

すると、客の1人がコップを落として割ってしまった。

「あつ・・・」

「大丈夫ですかご主人様！」

スウは慌てて雑巾を持って行き、拭き始める。

「すいません、ボクも手伝います！」

「大丈夫ですご主人様。破片がありますから危ないですよ」

「あ、はい。」

「明日岡君、完全にメイドやん・・・」

「カワイイな、ああいう明日岡も・・・」

破片を片づけ、持つて行くスウ。

そんな彼を、先程の客が怪しい目で見つめていた・・・

次回、事件発生！？

FILE 49：可憐なメイド刑事・スウ！？『3』

スウはその後、客にマジメに対応していき、いつの間にか売れっ子になっていた。

「店長・・・これ、昨日の売り上げの7倍はいきますよ・・・」

「スウちゃん・・・正社員になつてもらおうかしら・・・」

そしてその日は大盛況の内に、閉店時間となった。

「え？買い出しですか？」

「ええ、今日中に買う予定だった食材をかうの忘れてて・・・」

「じゃあ、篤子。店長に付き添つてやつてくれ。」

「スウは？」

「オレは留守番してる。」

「大丈夫？」

「心配いりません。不審者がいたら捕まえてやりますよ！」

「じゃあ、お願いしようかしら・・・」

店長は篤子と一緒に、買い出しに出て行った。

スウはテキパキと戸締まりをしていた。

「さてと・・・1階はできたな。店長と篤子が帰つて来るから、裏口は開けといて大丈夫かな？」

スウは2階に上がって行く。

スウが2階に上がった直後、店内に影が侵入した。

「フウ、これで戸締まりはできたな。さて、降りるか・・・」

その瞬間、スウの手がいきなり後ろに引っ張られた。

グイッ！

「？」

ガチャン！

「！！（手錠・・・！？）」

「静かにしな・・・」

スウの後ろに、いつの間にか影があった。

「（コイツ・・・昼間の客か！！）」

スウは1階に降ろされ、床に座らされた。

両手は後ろに回されて手錠を掛けられ、口はガムテープで塞がれている。

「・・・（コイツ・・・まさか例の通り魔か？）」

「この店は良いな。こんなカワイイ娘が見つかるんだから。今までオレが手にかけてヤツらも、ここの客だったからな・・・」

「（やはりか！）」

「だがオマエはすぐに殺すのは惜しいな。オレがオマエを女にしてやるよ。オレにはオマエの本当の姿がわかるからな・・・」

男はスウに近づく。

「フ・・・ンガアアア！！」

ブツチィー！！

何とスウは、自力で手錠を引きちぎってしまった。

「え！？」

ベリッ！！

「テメエ・・・夢見んのも限度があんぞ！オレの本当の姿がわかっただあ！？そういう事は・・・」

「ヒイツ!?」

スウは男を一本背負いで投げ飛ばした。

ブンッ!!

ズドン!!

「1回つき合ってから言え!!」

その後、連続通り魔はアツサリ逮捕された。

「お疲れ様、2人共。なかなか様になってたわ、2人のメイド姿。」

「ぐ・・・」

「潜入捜査はもう懲り懲りだ・・・」

「情けないの、たかが喫茶店の潜入捜査で。」

「最近の喫茶店はスゴいんだよ・・・」

「はい、もしもし? スウ君、電話よ! メイド喫茶から。」

「え!?!」

「スウ君のメイド、お客さんに評判良かったみたいだから、本格的にバイトしないかって。あ、篤子ちゃんもついでにどうかって。」

「断固お断りだ!」

「スウのついで・・・アタシが・・・!?!」

この言葉により篤子のプライドがキズついたのか、スウを道連れに本格的にメイド喫茶のバイトを始める事になったのは、ここだけの話・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8393a/>

名探偵・スウと篤子の事件簿

2011年7月9日16時15分発行